

The Molecular Biology Society of Japan

MBSJ NEWS

日本分子生物学会

2010.2

No.95

会報

目次

■ 緊急フォーラム「事業仕分けから日本の未来の科学を考える」開催報告	1
■ Web版会員名簿（会員管理システム）における公開項目の初期設定変更のお知らせ	2
■ 追悼文「故三浦謹一郎先生を悼んで」村松正實 「三浦謹一郎先生のご逝去を悔やんで」西村 暹	3
■ 日本分子生物学会第10回春季シンポジウム「分子を語る、分子で語る」のご案内	6
■ 第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会合同大会（BMB2010）開催のご案内（その1）	8
■ 第32回日本分子生物学会年会報告	12
■ 学会誌「Genes to Cells」に関するお知らせ	13
■ 研究倫理委員会・若手教育問題ワーキンググループ報告	14
■ 第32回日本分子生物学会年会・男女共同参画企画ランチョンワークショップ開催報告	20
■ 男女共同参画委員会・年会における発表者の属性統計調査報告	24
■ 第16期第3回理事会記録	25
■ 平成22年度（第32回）通常総会記録	34
■ 平成21年度（2009年度）収支決算報告	39
■ 監査報告書	43
■ 平成22年度（2010年度）収支予算	44
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について	45
■ 研究助成一覧	45
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ ○第13回マリンバイオテクノロジー学会大会 ○第14回国際免疫学会議	48
■ 賛助会員芳名	49



特定非営利活動法人

日本分子生物学会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/>

Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Mitsuhiro Yanagida | Frequency: Monthly

Current Volume: 15 / 2010 | Impact Factor: 3.317

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や、先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界で4,000以上の機関で読まれており、年間12,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。

Genes to Cells 投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への収載を待たずにオンラインで出版されます
- 出版後6か月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- 出版されると直ちに無償公開となるオープンアクセスオプション『OnlineOpen』（有料）をご利用いただけます

オンライン投稿はこちら
<http://mc.manuscriptcentral.com/gtc>

2009年出版 引用数TOP 論文 *2009年12月末現在

Role of ornithine decarboxylase antizyme inhibitor in vivo (Volume 14, Issue 1)

Tang H, Ariki K, Ohkido M, et al.

Initiator titration complex formed at datA with the aid of IHF regulates replication timing in Escherichia coli (Volume 14, Issue 3)

Nozaki S, Yamada Y, Ogawa T

Ctf4 coordinates the progression of helicase and DNA polymerase alpha (Volume 14, Issue 7)

Tanaka H, Katou Y, Yagura M, et al.

ジャーナル閲覧ページ

www.interscience.wiley.com/journal/gtc

日本分子生物学会の会員はオンラインジャーナルに無料でアクセスしていただけます。

ユーザー登録は学会事務局までお申し込みください。

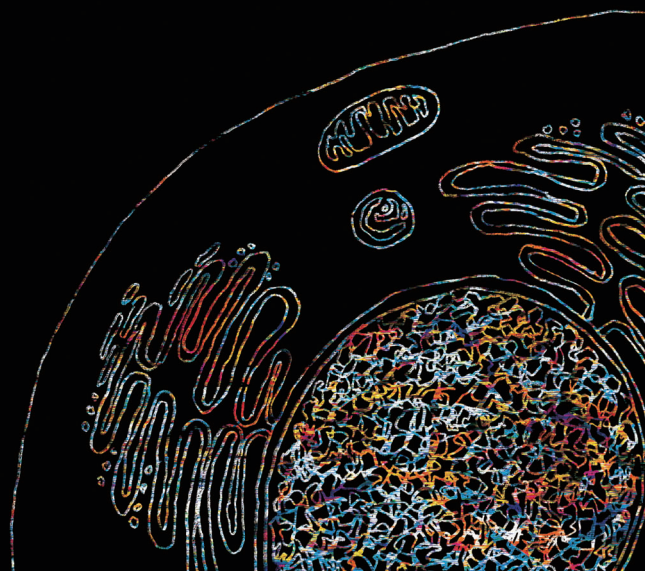
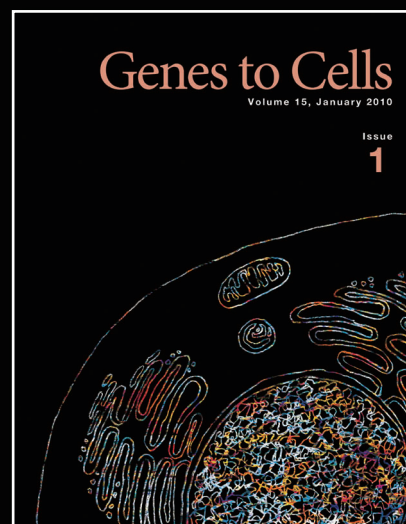
日本分子生物学会事務局: info@mbsj.jp

登録後のアクセスに関するご質問は、

Wiley-Blackwellカスタマーサービスにて承ります。

Wiley-Blackwellカスタマーサービス: cs-japan@wiley.com

 **WILEY-BLACKWELL**



緊急フォーラム「事業仕分けから日本の未来の科学を考える」開催報告

昨年末に、様々な国の事業について予算執行の効果と目標達成の実績を確認する事業仕分けが行われ、多くの事業について予算縮減などの提案がなされました。科学技術の研究と教育に関わる事業についても同様に判断されたものが多く、これらの判断がそのまま平成 22 年度以降の予算に反映されると、研究教育環境の急激な悪化が見込まれることから、日本分子生物学会は理事長名および多くの学協会との連名という形で、意見表明をいたしました。

さらに、多くの学会員から文科省の学術政策についての問い合わせや危惧する意見が出されたことから、12 月 9 日の年会初日夜 7 時から緊急フォーラム「事業仕分けから日本の未来の科学を考える」を開催しました。

フォーラム開催に先立って学会会員から事業仕分けについての意見を求めるアンケートを実施し、送られた意見をまとめた冊子を配布して、フォーラムにおける議論の資料としました。アンケートの意見は、PDF ファイルとして学会ホームページ (http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/youbou09/kinkyu_forum.pdf) に掲載しました。

フォーラムは、文部科学省から出席していただいた石井康彦・ライフサイエンス課長と山下恭徳・学術研究助成課企画室長の他に岡田清孝理事長と小原雄治年会長の 4 名のパネリスト、篠原彰理事による資料説明、石野史敏庶務幹事の司会で開催されました。フォーラムにおいて、後藤斎・文部科学省政務官からのメッセージを石井課長が代読され、文部科学省として今後も科学技術・学術研究を引き続き協力に推進するが、学術・研究者コミュニティからも研究の現状や課題、今後の展開などについて国民に説明する必要がある、これらの問題について建設的な議論を求めるとのコメントがありました。その後、約 300 名の出席者から活発な意見や質問があり、研究者の不安と混乱を収拾するとともに、学術研究と教育の新しい方向を定め、体制を築くためには、「文科省、政府と協調した新しい科学政策立案へ向けての制度作り」および「科学者から国民へ向けたメッセージ」が重要であることを確認しました。石井課長からは、今後の科学政策について学会などで協議する委員会があれば、是非とも協力したいという意見をいただいたので、具体的な行動につなげるための協議も鋭意行なっていくつもりです。緊急フォーラムにおける議論内容は、HP に掲載する予定で準備を進めています。

来年度以降の学術研究と教育の事業執行体制が、私たちの意見を反映したものになるように、注意深く経緯を見守りたいと思います。生物科学学会連合においても、今回の分子生物学会の対応は迅速で適切なものだったと評価していただいています。今後も会員の皆様の協力をお願い致します。

2010 年 2 月 20 日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

理 事 長 岡 田 清 孝

庶務幹事 石 野 史 敏

重要なお知らせ Web 版会員名簿（会員管理システム）における公開項目の初期設定変更のお知らせ

2010 年 2 月 22 日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

本学会では、学会ホームページ上に会員管理システムを設置し、会員システム上において Web 版会員名簿（会員検索・閲覧）を運用してきました。しかしながら、2007 年の新システム移行時に、初期設定の公開項目を、・名前・会員番号・会員種別に限定したことと、会員の皆様からのアクセスが少ないこともあり、本来の Web 会員名簿が機能していない状況がありました。

このことについて、昨年 12 月の定例理事会において検討しました結果、2010 年 3 月 10 日より、公開項目の初期設定を下記のとおりに変更することが決まりましたので、お知らせいたします。

会員の皆様の利便性を向上させるため、ご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

〈変更内容〉

【従来の初期設定の公開項目は次のとおり】

・名前・名前カナ・名前ローマ字・会員番号・会員種別

【2010 年 3 月 10 日以降は、初期設定において、以下の項目も公開されるようになります】

・所属名称・所属部署・所属住所・所属 FAX・連絡先メールアドレス

従来、所属の情報をあえて非公開項目に設定されていた会員におかれましては、お手数をおかけしますが、再度の「非公開」設定手続きをお願いいたします。

なお、同会員システム（Web 版会員名簿）を閲覧できるのは会員の方々のみであることをご考慮いただき、所属に係る項目についてはできるだけ「公開」設定を選択してくださるよう、ご協力のほどをお願い申し上げます。

—— 会員管理システム URL ——

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/secretariat/member/index.html>

故 三浦謹一郎先生を悼んで

埼玉医科大学ゲノム医学研究センター名誉所長／東京大学名誉教授

村松 正實



昨年9月、三浦謹一郎先生が急にお亡くなりになった。私は、10日も経った後の、日本癌学会で初めてその知らせを受けて、顎然としたのだった。昨年中は学会や研究会で2～3回お会いして、お元気の御様子であったので、何か、急性の病で亡くなられたものと思われ、同年輩（実は私より半年年長）の貴重な友を失った驚きと、悲しみが、じわじわと押し寄せて来た。

三浦さん（親しみを込めて、敢えてこう呼ばせて戴く。）は本当に私と同世代の、日本の戦後の生命科学の発展を自ら経験し、支えて来られた、戦友と云ってよいお方であった。

彼は理学部、私は医学部出身で、考え方に多少の差があったとしても、科学的思考という点では勿論一致しており、私が臨床などを経験している間に、彼は理論的にも実験においても、常に一步先んじており、いろいろと教えられる事が多かった。

三浦さんのお仕事については、若干、領域の近い西村暹氏（何と3人共同の年であったのだ！）が詳しく書かれる由、私は極く大雑把に、歴史的に著名な2つのお仕事を挙げるに止めたい。その一つは転移RNAの構造と機能に関するもので、遺伝情報の翻訳に関して大きな意味を持つものであった。即ち、1つのアミノ酸に対応する転移RNAが、複数存在する事を証明したのである（1965、tRNA isotypeの存在）。これは、遺伝子発現が、このレベルでも調節され得る事を世界で最初に示したものであった。第二の大きなお仕事は、数年後の、真核生物におけるメッセンジャーRNAの

5' 末端にキャップ構造が存在することの発見である。

これも歴史に残る大発見であり、その構造の機能や意味について、その後、多くの研究が各国で為されることになる。

三浦さんは、その後も、特に RNA について広く深く研究され、われわれを指導して下さったのみならず、亦多くの優れた後継者をも育てられた。すぐに想い浮ぶ名前でも、渡辺公綱さん、古市泰宏さん、下遠野邦忠さんなど、既に一家を為しておられる方も多い。

三浦さんは、お会いすると常に、「やあ」と手を挙げ、微笑を絶やさないう方であった。それでいて、学問的には厳しく、評価も方法論迄遡って為されるのが常であった。従って学者の間でも評判は高く、分子生物学会の会長も務められ、学士院賞などにも輝いておられた。

学会へ行っても、もうあの暖かい笑顔を見る事は出来ないと思うと、“同期の櫻”の関係にある筆者は、胸が痛む想いである。

しかし、三浦さんの学問の精神は後継者、否、全てのこの分野の人々に受け継がれ、発展し続けるであろう。若い科学者達が、近年、日本の学問を襲っている不条理な試練に負ける事なく、これを達成し、日本の科学に栄光を齎らす事を祈って筆を擱く。

三浦謹一郎先生のご逝去を悔やんで

筑波大学 生命科学動物資源センター

西村 暹

三浦謹一郎先生が昨年 9 月 21 日に急逝された。7 月に新潟で開かれた日本 RNA 学会にもお元気で出席、発言されたと伺っていたので愕然としました。謹んでお悔やみ申し上げます。

三浦先生は 1931 年のお生まれ、丁度私より 1 ヶ月早いお生まれですが、東大理学部化学科では二年先輩でした。先生は二本鎖 DNA の研究で著名なコロンビア大学のシャルガフ教授の下に留学され、東大では渡辺格先生に就かれて、当時から分子生物学、特に RNA 研究を始められました。まさに分子生物学の黎明期から活躍を続けられた日本の分子生物学、特に蛋白質合成、RNA 研究の権威であられました。

先生は名古屋大学理学部分子生物学研究施設、国立遺伝学研究所、東大工学部教授を歴任され、さらに 1991 年に東大を定年退官されたあとも、学習院大学、千葉工業大学で教鞭と研究を続けられ、お亡くなりになる前も東大柏キャンパスで客員として研究を続けられていました。正に生涯現役を貫かれました。この間、渡辺公綱先生、また古市泰宏先生、下遠野邦忠先生他、多数の日本の分子生物学をリードする研究者が先生の教室から排出しました。

三浦先生のごく初期の御研究で、著名なのは tRNA の構造と機能に関するものです。酵母未分画 tRNA を放射性アミノ酸でチャージし、それを RNase T1 で切断して、アミノ酸で標識された 3'-末端断片を分別することにより、tRNA は一つのアミノ酸に対して複数分子種が存在することを明らかにされました。(Torao Ishida and Kin-ichiro Miura, J.Mol. Biol., 11,341-357, 1965)。酵母アラニン tRNA の全構造がちょうど R.W.Holly らによって決定された時期の御研究で、まさに革新的な御仕事であります。

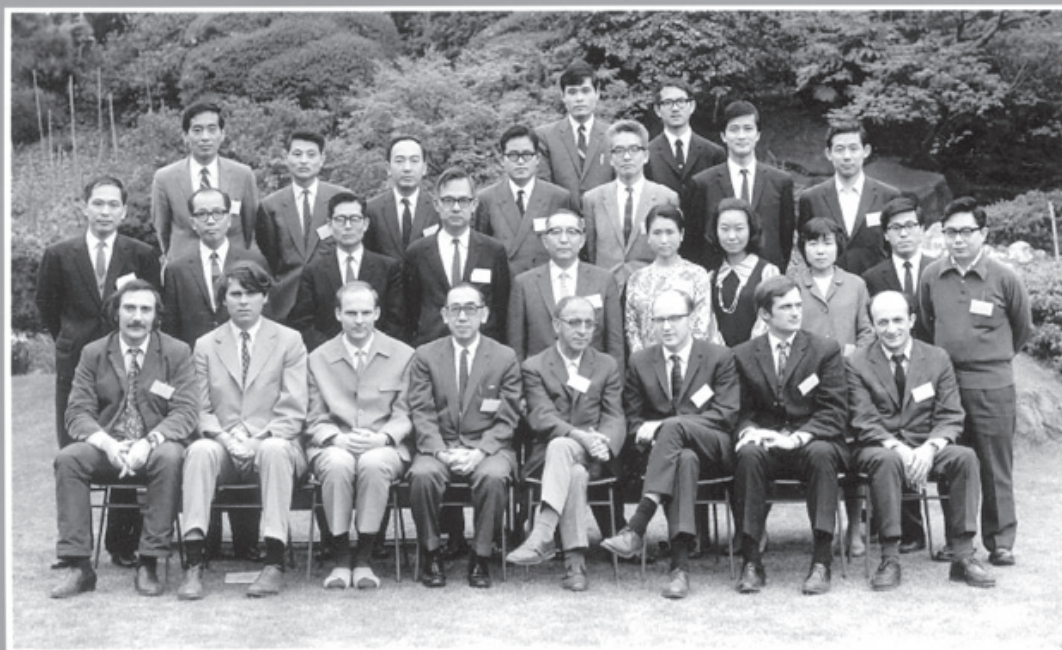
さらにもっとも三浦先生の名声を高めたのは 1970 年始めの御研究、古市先生とされた真核生物のメッセンジャー RNA のキャップ構造の発見であります。この御功績によって先生は 1988 年に、第 78 回日本学士院賞を受賞されました。ちょうど同じ年に私も日本学士院賞を受賞し、授賞式その他の行事を三浦先生と共にできたのはなつかしい思い出となってしまいました。なお、三浦先生は、日本 RNA 学会、日本蛋白工学会の設立にも尽力され、また日本分子生物学会の会長も務められ、関連学会の活動に貢献されました。

私が三浦先生を個人的にもっとも尊敬している点は、これまで述べたような御活躍の他に、先生の研究に対する卓越した評価であります。三浦先生は世間の流行に左右されることなく、よい研究を見抜く才能をお持ちでした。お会いするたびに三浦先生が「今はこういうアイディアでこんな研究をやっている。もうすぐ論文を書ける。」と静かな口調の中にも熱っぽく語っておられたのが思い出されます。御自分のアイディアを御本人と限られたスタッフで研究するスタンスであります。私事ではありますが、三浦先生は私が 1960 年代にオークリッジ国立研究所でおこなった大腸菌 tRNA の限定分解によって tRNA のアミノ酸受容能とアミノ酸転移能が分離できるという研究を、他の人があまり注目しない時に高く注目しておられ、私の研究をプロモートしていただきました。

三浦先生のこれまでたどられた御研究の道は、きっと先生の御弟子、さらにその方々の御弟子さんによって受け継がれ、ますます注目をあびつつある日本の RNA 研究の発展を導くと確信しております。それをせめてもの慰めとして、三浦謹一郎先生のご冥福を祈ります。

(付録)

キャップ構造の発見に関して、今でも思い出されるのは、非公開の研究会で共同研究者の古市博士が細胞質多角体病ウイルスの転写系に S-アデノシルソチオニンを加えると、転写効率が 100 倍近く上昇することを発表された事である。この結果は私にとって驚きであり、ショックであった。ぜひ、自分もやって見たいという気持ちになったことを覚えている。おそらくその席にいた他の人達も同じ思いだっただろう。ただ、日本では他人の見つけた事には手を出さないという不文律があり（そのくせ外国でやられた研究はすぐまねをするが）、それゆえ日本では長い間キャップ構造の研究は三浦グループ以外はやらなかった。日本ではキャップの情報は外国にくらべ 1 年近くも早かったので、日本の核酸研究者がもっと関わっていればと今でも悔やまれる。



Tokyo 1970

1970 年に三浦義影先生の御尽力で学術振興会の後援の下、日米の RNA 研究の研究者が東京六本木の国際文化会館に集まった際の記念写真。最後列左から 3 番目が三浦謹一郎先生。前列中央が、三浦義影先生。当時の米国の若手研究者がほとんど今でも現役なのにくらべ、日本では大部分の方が現役を退いている中、三浦先生は最後まで現役研究者として活躍された。

日本分子生物学会第10回春季シンポジウム「分子を語る、分子で語る」のご案内

第10回春季シンポジウム「分子を語る、分子で語る」は、日本三景の1つとして知られ、JR仙台駅から電車で30分程度と交通の便も良い松島でおこないます。

第1回以来となるスクール形式（1泊2日）で開催いたしますので、学生やポスドクなど若手の方に多くご参加いただき、ともに学びながら活発な議論のできるシンポジウムとなるよう企画を進めています。

事前参加登録およびポスター発表は、下記のウェブサイトよりお申し込みください。

<http://www.mbsj-spring2010.org/>

【春季シンポジウム】

テーマ：「分子を語る、分子で語る」

会 期：2010年6月7日(月)～8日(火)

会 場：ホテル松島大観荘

宮城県宮城郡松島町松島字犬田 10-76

(仙台駅から電車で30分)

TEL. 022-354-5214

<http://www.taikanso.co.jp/>

定 員：300名

参加登録費：相部屋（学生）→10,000円

相部屋（一般）→15,000円

シングル→20,000円

参加登録費には、宿泊代（朝食付き）、昼食代、要旨集代が含まれます。

7日(月)の夕食・懇親会には無料でご参加いただけます！

プログラム：本ページ右側をご覧ください。

【市民公開講座】

シンポジウム前日には、市民公開講座「医療につながる分子生物学」を仙台市博物館にて開催いたします。

日本分子生物学会が、今後さらに地域に開かれた学会としての展開を図るべく、県外からの来訪者にも博物館の展示等を見て頂けるような、歴史やアートにふれることもできる市民公開講座です。ぜひご参加ください。

テーマ：「医療につながる分子生物学」

日 時：2010年6月6日(日) 13:00～16:30（予定）

会 場：仙台市博物館 講堂

(市内、仙台駅よりバスで約10分)

定 員：200名（事前申込不要）

参加費：無料（ただし、博物館の常設展観覧料は有料）

プログラム：講演 岡野 栄之（慶應義塾大学医学部）

片桐 秀樹（東北大学大学院医学系研究科）

総合討論 岡野教授×片桐教授

(司会：大隅) +フロアから

世話人：大隅典子（東北大学大学院医学系研究科）

事務局：特定非営利活動法人 日本分子生物学会 事務局

東京都千代田区飯田橋 3-11-5 20山京ビル 11階

TEL. 03-3556-9600

E-mail: info@mbsj.jp

【プログラム 6月7日(月)】

「遺伝暗号リプログラミング：生物の根底を書き換える」

基調講演：菅 裕明（東京大学先端科学技術研究センター）

「慢性炎症を基盤とする生活習慣病病態へのアプローチ」

世話人：西村 智（東大・TSBMI、JST さきがけ）

1. 西村 智（東大・TSBMI、JST さきがけ）

「生体イメージングでみる慢性炎症を基盤とする生活習慣病態」

“In vivo imaging reveals cellular mechanisms of inflammatory diseases”

2. 阪上（沢野） 朝子（理研 BSI、JST ERATO）

「生体における細胞周期動態を読み解く」

“Visualizing spatiotemporal dynamics of multicellular cell-cycle progression”

3. 近藤 科江（京大・院医）

「低酸素誘導因子 HIF-活性の生体イメージング」

“In vivo imaging of Hypoxia inducible factor (HIF) activity”

4. 高倉 伸幸（阪大・微研）

「腫瘍形成における幹細胞医学」

“Stem cell biology in the tumor development”

5. 今村 健志（癌研生化・JST CREST）

「生体光イメージングを駆使した細胞機能と微小環境の可視化」

“Visualization of cellular function and microenvironment by in vivo optical imaging”

「エピジェネティックな制御を介した発生・分化のメカニズム」

世話人：岡村 大治（東北大・加齢研）、

古橋 寛史（東北大・院薬）

1. 古橋 寛史（東北大・院薬）

「世代を超えたヒストン修飾の維持と、線虫生殖系列の発生におけるその役割」

“Transgenerational maintenance of histone modification and its role in *C. elegans* germline development”

2. 有馬 隆博（東北大・未来医工学治療開発センター）

「DNA メチル化制御によるゲノムインプリンティングと生殖医療」

“Genomic imprinting in regulation of DNA methylation and reproductive medicine”

3. 加藤 恭丈（東北大・院医）

「メチオニン・アデノシル転移酵素（MATII）による転写制御とエピジェネティクス」

“Methionine adenosyltransferase II serves as a transcriptional corepressor and chromatin regulation”

4. 青田（浦） 聖恵（阪大・院医）

「ヒストン H3K36 メチル化酵素による転写制御と疾患」

“Histone H3K36 methyltransferase functions in transcriptional fine tuning during normal development”

5. 立花 誠（京大・ウイルス研）

「ヒストンのメチル化による細胞系列特異的な転写制御」

“Cell lineage-specific regulation of transcription by histone methylation”

「ポスター発表&ミキサー」

「自由討論：分子生物学の将来について語る」

【プログラム 6月8日(火)】

「環境応答の分子基盤」

基調講演：山本 雅之（東北大学大学院医学系研究科）

「ゲノム不安定性：分子基盤から高次生体機能へ」

世話人：高田 穰（京大・放射線生物研究センター）

1. 井倉 毅（京大・放射線生物研究センター）

「チェックポイントシグナルの活性化における損傷クロマチンのダイナミクス」

“The role of chromatin dynamics in DNA damage-induced checkpoint activation”

2. 稲垣 昌樹（愛知県がんセンター、名大・院医）

「多彩なリン酸化によってチェックポイントキナーゼ 1 (Chk1) は機能修飾される」

“Multi-site phosphorylations by different kinases lead to entire Chk1 function”

3. 江刺 史子（オックスフォード大）

「DNA 損傷修復におけるガン抑制遺伝子の役割」

“Role of tumour suppressor gene in DNA repair”

4. 小林 武彦（遺伝研）

「老化と若返りの鍵を握る rDNA の機能」

“rDNA stability affects cellular aging and rejuvenation”

5. 西村 栄美（東京医科歯科大 難治研）

「ゲノム不安定性とステムセルエイジング」

“Genomic instability and stem cell aging”

「身体・脳システムの心理表出行動と分子動態基盤」

世話人：小柴満美子（東農工大）

1. 石原 健（九大）

「線虫の神経回路における感覚情報の統合と記憶の忘却のメカニズム」

“Mechanisms of sensory integration and memory loss in the neural network of *C. elegans*”

2. Allan V Kalueff (Tulane Univ., Georgetown Univ.)

“Molecular mechanisms of zebrafish fear”

3. 竹内 秀明（東大）

「メダカの社会性行動を生み出す脳機能の解析」

“Analysis of brain functions associated with medaka fish social behaviors”

4. 小柴 満美子（東農工大）

「相互インタラクションによる同士間社会性発達：鳥類および霊長類モデルから」

“Peer-social development based on mutual interaction in avian and primate models”



第 33 回日本分子生物学会年会・第 83 回日本生化学会大会 合同大会 (BMB2010) 開催のご案内 (その 1)

第 33 回日本分子生物学会年会は、第 83 回日本生化学会大会と合同で開催いたします。

日本の生命科学分野を代表する二つの学会が同時開催するにあたり、活気溢れる内容となるよう様々な企画・準備を進めています。

会員の皆様より多くのご参加をお待ちしております。

会 期：2010 年 12 月 7 日(火)～10 日(金) (4 日間)
会 場：神戸ポートアイランド
大 会 長：第 33 回日本分子生物学会年会 年会長 谷口 維紹 (東京大学)
第 83 回日本生化学会大会 会 頭 田中 啓二 (東京都臨床医学総合研究所)
演 題 登 録 期 間：2010 年 7 月 1 日(木)～7 月 15 日(木)予定
事前参加登録期間：2010 年 7 月 1 日(木)～10 月 29 日(金)予定
*上記はあくまで予定であり、若干前後する可能性もあります。
年会事務局連絡先：BMB2010 事務局
〒 532-0003 大阪市淀川区宮原 4-4-63 新大阪千代田ビル別館 9 階
Tel：06-6350-7247 Fax：06-6350-7248 E-mai：bmb2010@aeplan.co.jp
URL：http://www.aeplan.co.jp/bmb2010

【プログラム (予定)】

○プレナリーレクチャー

Alan Aderem (Institute for Systems Biology)	岩田 想 (京都大学)
Peter Walter (University of California at San Francisco)	加藤 茂明 (東京大学)
西倉 和子 (The Wistar Institute)	西川 伸一 (理化学研究所)

○シンポジウム

大会長およびプログラム委員の企画による約 20 テーマを開催します (次ページ参照)。

○ワークショップ (公募締切：2010 年 3 月 19 日(金))

会員より公募し採択された約 50 テーマを開催します。

募集要領は後述の『ワークショップ企画公募について』をご参照ください。

○一般演題 (ポスター発表、一般口頭発表への採択)

演題登録期間：2010 年 7 月 1 日(木)～7 月 15 日(木) (予定)

採択された全ての一般演題は、ポスター発表を行っていただきます。

また、一般口頭発表への採択希望を募り、審査のうえ採択された演題については口頭での発表も行っていただきます。

演題申込みに関する詳細は、会報 96 号 (6 月発行予定) および決定次第合同大会ホームページにてお知らせいたします。

なお、演題の登録には、日本分子生物学会または日本生化学会の会員であることが必要です。未入会の方はお早めに入会手続きをお済ませください。

○マスターズレクチャー

○バイオテクノロジーセミナー (ランチョンセミナー)

○市民公開講座 (2010 年 12 月 11 日(土) 東京大学 安田講堂にて開催)

○その他の企画 (男女共同参画、若手教育シンポジウム等)

【シンポジウム】

分 野	テーマタイトル (仮)	オーガナイザー
脂質・タンパク質・糖・代謝関連	脂質メディエーターと免疫・炎症反応 Roles of lipid mediators in inflammation and immunity	横溝 岳彦 (九州大学) 吉村 昭彦 (慶応大学)
	生命の鍵を握るタンパク質分解 Proteolysis - The key for life	反町 洋之 (東京都臨床医学総合研究所) 村田 茂穂 (東京大学)
	糖鎖研究のフロンティア：新規の糖鎖構造・代謝・機能 Frontiers in glycobiology: novel glycan structures, metabolisms & functions	鈴木 匡 (理化学研究所) 安形 高志 (大阪大学)
細胞応答	癌悪性化の分子機構 Molecular Mechanisms of Cancer Progression	斎藤 正夫 (山梨大学) 伊東 進 (筑波大学)
	細胞・組織の極性及び形態形成の制御メカニズムとその破綻 Determination and Disruption of Polarity in Cell and Tissue Morphogenesis	菊池 章 (大阪大学) 熊ノ郷 淳 (大阪大学)
細胞の構造と機能	Ectodomain Shedding の細胞生物学 Cell Biology of Ectodomain Shedding	東山 繁樹 (愛媛大学) 武田 壮一 (国立循環器病センター)
	細胞核ダイナミクス研究と病態学研究の融合 Interface between nuclear dynamics and diseases	米田 悦啓 (大阪大学) 宮川 清 (東京大学)
	オルガネラ膜構造のダイナミクス Dynamics of organelle membrane	中野 明彦 (東京大学) 大野 博司 (理化学研究所)
ゲノムと遺伝情報	染色体オペレーティング・システム Chromosome OS	石川 冬木 (京都大学) 深川 竜郎 (国立遺伝学研究所)
	エピゲノム情報のリードアウトと制御 Readout mechanism and regulation of epigenome information	五十嵐和彦 (東北大学) 吉田 稔 (理化学研究所)
	ゲノムと遺伝情報の安定な警鐘とその破綻による疾患 Stable inheritance of genome and diseases caused by its failure	正井 久雄 (東京都臨床医学総合研究所) 藤田 雅俊 (国立がんセンター)
神経科学	行動と神経回路 Behaviors and Circuits	多羽田哲也 (東京大学) 飯野 雄一 (東京大学)
	シナプス機能の生後発達とその異常 Postnatal development of synaptic function and its disorder	狩野 方伸 (東京大学) 内匠 透 (広島大学)
発生と再生	発生・分化におけるエピジェネティック制御 Epigenetic Regulation in Development and Differentiation	仲野 徹 (大阪大学) 田賀 哲也 (東京医科歯科大学)
	発生と再生 Principles in development and regeneration processes	高橋 淑子 (奈良先端科学技術大学院大学) 三浦 正幸 (東京大学)
疾患生物学	プロテインホスファターゼ病 Protein phosphatase diseases	畠山 昌則 (東京大学) 的崎 尚 (群馬大学)
	慢性炎症を基盤とした疾患の生物学：生活習慣病からがんまで Biology of inflammation-related diseases: From metabolic syndrome to cancer	大島 正伸 (金沢大学) 真鍋 一郎 (東京大学)
	ストレス応答と疾患 Stress response and diseases	武田 弘資 (東京大学) 本橋ほづみ (東北大学)
植物	ゲノムが重なる時に何が起きるのか—植物科学からのアプローチ What's happen when two genomes coexist: Approaches from plant science	塚谷 裕一 (東京大学) 木下 哲 (奈良先端科学技術大学院大学)

※その他企画中

【ワークショップ企画公募について】

合同大会では、ワークショップの企画を会員の皆様より公募いたします。

ご提出いただいた企画案は、厳正なる審査の上、採否を決定いたします。採否結果は4月中旬頃に応募者へご連絡いたします。また、審査の結果、内容によってはシンポジウムとして採択することもあります。

下記募集要項をご確認のうえ、奮ってご応募ください。ユニークな企画をお待ちしております。

【ワークショップ企画 応募要領：2010年3月19日(金)締切】

＜募集要項＞

- ・1テーマあたり2時間30分の時間枠で、約50テーマを採択します。
- ・ご提案いただくオーガナイザーは、両名とも日本分子生物学会または日本生化学会の会員に限ります。
- ・演者につきましては、オーガナイザーにてご指定いただきます（一般演題からの採択はありません）。
- ・海外から演者招聘される場合は、合同大会から15万円を上限として補助を予定しています。
- ・国内演者については、旅費・宿泊費・謝金等の支給はできません。ただし、非会員演者は参加登録費を無料とさせていただきます。
- ・毎日2時間30分の枠で約20テーマのシンポジウムおよびワークショップが同時進行する予定です。

＜応募要領＞

下記事項をご記入のうえ、3月19日(金)までにBMB2010事務局までE-mailにてご提出ください。

- 1) テーマタイトル（和文・英文）
- 2) オーガナイザーの氏名・所属（2名）
- 3) 概要（400字程度）
- 4) 予定演者の氏名・所属（応募時での演者による講演承諾は不要です）
- 5) 両オーガナイザーの氏名、連絡先、会員番号
- 6) 予想される聴衆数

BMB2010に関するお問合せ

BMB2010事務局

〒532-0003 大阪市淀川区宮原4-4-63 新大阪千代田ビル別館9階

Tel：06-6350-7247 Fax：06-6350-7248 E-mail：bmb2010@aeplan.co.jp

URL：http://www.aeplan.co.jp/bmb2010/

【BMB2010 組織委員一覧】

（2010年1月現在）

＜大会長＞

第33回日本分子生物学会年会	年会長	谷口 維紹（東京大学）
第83回日本生化学会大会	会頭	田中 啓二（東京都臨床医学総合研究所）

＜庶務幹事＞

第33回日本分子生物学会年会	庶務幹事	宮園 浩平（東京大学）
第83回日本生化学会大会	庶務幹事	水島 昇（東京医科歯科大学）

＜幹事補佐＞

第33回日本分子生物学会年会	幹事補佐	武田 弘資（東京大学）
		宮澤 恵二（山梨大学）
第83回日本生化学会大会	幹事補佐	石原 直忠（東京医科歯科大学）
		反町 洋之（東京都臨床医学総合研究所）

<プログラム委員> *印は幹事補佐を兼務

脂質・タンパク質・糖・代謝関連

鈴木 匡 (理化学研究所)

反町 洋之 (東京都臨床医学総合研究所) *

横溝 岳彦 (九州大学)

細胞応答

菊池 章 (大阪大学)

宮澤 恵二 (山梨大学) *

細胞の構造と機能

石原 直忠 (東京医科歯科大学) *

東山 繁樹 (愛媛大学)

米田 悦啓 (大阪大学)

ゲノムと遺伝情報

五十嵐和彦 (東北大学)

石川 冬木 (京都大学)

正井 久雄 (東京都臨床医学総合研究所)

神経科学

狩野 方伸 (東京大学)

多羽田哲也 (東京大学)

発生と再生

高橋 淑子 (奈良先端科学技術大学院大学)

仲野 徹 (大阪大学)

疾患生物学

大島 正伸 (金沢大学)

武田 弘資 (東京大学) *

畠山 昌則 (東京大学)

植物

塚谷 裕一 (東京大学)

(敬称略)

第 32 回日本分子生物学会年会報告

第 32 回日本分子生物学会年会は昨年 12 月 9 日(水)～12 日(土)の 4 日間、パシフィコ横浜にて開催いたしました。おかげさまで参加者総数 8748 名、演題数 4338 (うち一般演題 3741) の盛会となりました。

今回は年会長と幹事会の思い入れで「分子生物学会の原点—すべては議論から—」というテーマといたしました。学生から大先生までが分け隔てなく「議論すること」を中心に、「国際性」「社会性」「IT の活用」を加えて 4 本柱として様々な企画や仕掛けを「実験」させていただきました。その評価はアンケート結果などで現在精査中ですが、課題も含めてそれぞれに成果が得られたと思います。

「議論」については、ポスター会場の盛り上がりがわれわれ幹事会の予想をはるかに超えるものになったことに尽きると思います。二日目にはあまりの熱気に冷房を入れたほどですし、最終日の最後の最後まで議論が続いたことは正直驚きでした。全員が 1 会場の集まれる会場構造は大きかったと思いますが、賛否両論ありましたディスカッサー制度は、今回はプラスの方向に寄与したように思います。うれしい誤算は、ディスカッサーが行く前にすでに議論が盛り上がっているポスターが多かったことです。これも制度の副次的効果かと思いますが、分子生物学会会員はやはり「議論」が好きなのだということで、改めて安心しました。ディスカッサーの方々に厚く御礼申し上げます。なお今回は学部学生が 1130 人参加しました。参加費を無料にした効果で、経営的には複雑なところですが、分子生物学会の熱い議論を将来の学会メンバーに刷り込んでもらうよい機会だったと思います。

「国際性」については、招聘予算を倍増して分野の第一線で活躍している海外の PI を 2 名以上シンポジウムに招いてもらいました。シンポジウムはすべて英語にして結果的によかったと思うのですが、一方で、アンケートでは「シンポジウムも日本語で」という希望が想像以上に多くありました。英語化の問題は分子生物学会で長年試行錯誤を繰り返してきた難しい問題ですが、私たち幹事会としては少なくともシンポジウムの英語化は避けて通れないと考えています。ただ、違う分野の研究者や学生のために座長がイントロを日本語で十分にやるとか、日本人演者はスライドの専門用語を和英両記するな

どの工夫は必要だったと思います。ポスターの英語表記についても類似の工夫が必要だったと思います。

「IT の活用」について、要旨集のオンライン化はおおむね賛同いただけたと思います。会場でのネットがつながりにくかったことやコンテンツの出来具合など、初めてのことゆえの問題はありましたが、今後の方向だと思いました。「せめて CD-ROM は配れ」との要望もありましたが、3 月末までオンライン検索や全ダウンロードができますので是非ご利用ください。

「社会性」につきましては、いわゆる「事業仕分け」結果への対応に追われてしまいました。緊急フォーラムに向けた準備や政府とのやりとりでは、岡田理事長・学会執行部のお手伝いができたと思います。単なる予算削減への抗議だけではなく、科学の意義を社会にどのように説明すべきなのか、そして科学を進める方策を研究者からいかに提言していくか、ということの重要性を改めて考えさせられました。今後の大きな課題だと思います。関連して、学会企画の「若手教育シンポジウム」は技術的なことを超えて「科学するとはどういうことか」に及びましたが、これが大盛況であったことは心強いことでした。

振り返ってみますと、あれもこれもやっておけばということが多々ありますが、焦点を絞って取り組んだので無事盛会のうちに「実験」を終えられたのだと思います。「実験」ゆえにご不便やご迷惑をかけたことがあるかもしれませんが、ご容赦いただければと存じます。本年会の議論や交流が今後の生命科学の発展につながることを期待しますし、議論の中から将来の優れた研究者が育つことを祈っております。最後に、プログラムの編成などで年会の企画・運営にご協力くださいました組織委員各位、オーガナイザー・講演者の皆様、全国よりご参加くださいました皆様、学会当日の数多くのスタッフの方々、そして大不況の中で援助を頂きました出展・ランチョンセミナー主催企業、助成諸団体に心より御礼申し上げます。また、年会長の「思いつき」に振り回されながら年会のために献身的に仕事をされた幹事会、年会事務局、学会事務局の皆様にも厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

第 32 回日本分子生物学会年会長
小原 雄治 (国立遺伝学研究所所長)

学会誌「Genes to Cells」に関するお知らせ

昨年より新たに33名の編集委員（Associate Editor）に加わっていただきましたので、『Genes to Cells』における国内の現編集委員をご紹介します。原著・総説を問わず、皆様からのご投稿を歓迎いたしますとともに、引き続きご支援のほどお願いいたします。

< <http://mc.manuscriptcentral.com/gtc/> >

Editor-in-Chief

柳田 充弘（京都大学大学院生命科学研究科）

Editors

谷口 維紹（東京大学大学院医学系研究科）

成宮 周（京都大学大学院医学研究科）

山本 正幸（東京大学大学院理学系研究科）

Associate Editors

相沢 慎一（理化学研究所発生・再生科学総合研究センター）

饗場 弘二（鈴鹿医療科学大学薬学部）

荒木 弘之（国立遺伝学研究所細胞遺伝研究系）

石井 俊輔（理化学研究所筑波研究所）

石川 冬木（京都大学大学院生命科学研究科）

大隅 典子（東北大学大学院医学系研究科）

大隅 良典（東京工業大学統合研究院）

岡田 清孝（自然科学研究機構基礎生物学研究所）

貝淵 弘三（名古屋大学大学院医学系研究科）

岸本 健雄（東京工業大学大学院生命理工学研究科）

田賀 哲也（東京医科歯科大学難治疾患研究所）

高井 義美（神戸大学大学院医学研究科）

田坂 昌生（奈良先端科学技術大学院大学）

田中 啓二（東京都臨床医学総合研究所）

中野 明彦（理化学研究所中央研究所）

中村 義一（東京大学医科学研究所）

中山 敬一（九州大学生体防御医学研究所）

鍋島 陽一（京都大学大学院医学研究科）

西田 栄介（京都大学大学院生命科学研究科）

箱嶋 敏雄（奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科）

花岡 文雄（学習院大学理学部生命科学科）

濱田 博司（大阪大学大学院生命機能研究科）

林 茂生（理化学研究所発生・再生科学総合研究センター）

半田 宏（東京工業大学大学院生命理工学研究科）

宮園 浩平（東京大学大学院医学系研究科）

山本 雅（東京大学医科学研究所）

山本 雅之（東北大学大学院医学系研究科）

新 Associate Editors

飯野 雄一（東京大学大学院理学系研究科）

上田 泰己（理化学研究所発生・再生科学総合研究センター）

上村 匡（京都大学大学院生命科学研究科）

影山龍一郎（京都大学ウイルス研究所）

倉田 のり（国立遺伝学研究所系統生物研究センター）

五島 剛太（名古屋大学高等研究院）

後藤由季子（東京大学分子細胞生物学研究所）

小林 武彦（国立遺伝学研究所細胞遺伝研究部門）

小室 一成（千葉大学大学院医学研究院）

近藤 滋（大阪大学大学院生命機能研究科）

佐谷 秀行（慶應義塾大学大学院医学研究科）

塩見 春彦（慶應義塾大学医学部）

篠原 彰（大阪大学蛋白質研究所）

白川 昌宏（京都大学大学院工学研究科）

白髭 克彦（東京工業大学大学院生命理工学研究科）

杉本亜砂子（理化学研究所発生・再生科学総合研究センター）

杉本 慶子（理化学研究所植物科学研究センター）

須田 年生（慶應義塾大学医学部）

多田 高（京都大学再生医科学研究所）

永田 和宏（京都大学再生医科学研究所）

永田 恭介（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

中別府雄作（九州大学生体防御医学研究所）

濡木 理（東京大学医科学研究所）

原田 慶恵（京都大学物質－細胞統合システム拠点）

平岡 泰（大阪大学大学院生命機能研究科）

本間 道夫（名古屋大学大学院理学研究科）

正井 久雄（東京都臨床医学総合研究所）

松崎 文雄（理化学研究所発生・再生科学総合研究センター）

松本 邦弘（名古屋大学大学院理学研究科）

三浦 正幸（東京大学大学院薬学系研究科）

水島 昇（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科）

宮脇 敦史（理化学研究所脳科学総合研究センター）

米田 悦啓（大阪大学大学院生命機能研究科）

（50音順、敬称略）

編集幹事 上村 匡

研究倫理委員会・若手教育問題ワーキンググループ報告

去る平成 21 年 12 月 10 日(木)にパシフィコ横浜において、分子生物学会・若手教育シンポジウム『若手教育ランチョンセミナー 2009—あなたのデータは大丈夫？正しい知識があなたを救う！』（主催：特定非営利活動法人 日本分子生物学会、協賛：(株)羊土社、協力：チエル(株)）が行われた。本シンポジウムは、昨年に引き続く第三回目の開催であるが、今年度は、講演（第一部）、パネルディスカッション（第二部）の二部構成で行い、400 名近い参加者があった。2007 年および 2008 年のシンポジウムでは主に現状分析や精神論を中心に据えたのに対し、2009 年のシンポジウムでは、大きく趣向を変えて知識的・技術的な側面から若手の教育を行うべく、4 つの技術論的講演とパネルディスカッションを行った。また開催時間を従来の夜間からランチョン形式に変更し、さらにチエル(株)より無償で貸与された『レスポンスシステム（レシーバーからの送信により聴衆の意見を即時にパワーポイント上に表示するシステム）』を導入するなど、多くの新たな試みを行った。

今回の試みは予想を遙かに超える大好評で、当日会場で行ったアンケートの結果では「今後このような活動を続けるべき」とした方が 95%と驚異的な数字を記録した。これは主催者としては嬉しい限りであるが、その一方で開場 1 時間前には既に長蛇の列ができ、会場は立ち見で溢れて入場が困難で、それを見て入場を諦めた方も多数いらっしゃったことが心残りであった。そこでより多くの方にこのシンポジウムの内容を知っていただくため、記録全文を本学会 HP に掲載すると共に、その一部を協賛の(株)羊土社のご協力で当社 HP 上で動画配信していただけることになった。当日あまりの混雑でやむなく見逃した方も、ここで初めてその存在を知った方も、是非それらをご覧願えれば幸いである。

本稿では、このシンポジウムの概略とアンケート結果に基づいた客観的分析、さらに今後の若手教育のあり方について述べる。なお文中は敬称略とした。ご了承いただきたい。

（文責：若手教育問題ワーキンググループ座長 中山敬一）

まず本題に入る前に、本シンポジウム開催までの背景について簡単に述べておきたい。ライフサイエンス分野で最大の学会の一つである日本分子生物学会では、科学的不正をなくすために若手教育からきちんと見直そうという視点から、2007 年より若手教育問題ワーキンググループ（以下、WG）を設置し、メンバーには世界を相手に奮闘中の 30～40 歳代 8 名を集めた。現在まで 3 年

間活動を行い、毎年の年会において「若手教育シンポジウム」を開催している。

元々、個人趣味的な意味合いが強かった科学は、近年急速に職業化すると共に不正の問題が後を絶たない。それは科学者の若手教育において「ルール」の明確な教育がなされていないことと、個々の研究室の“たこつぼ化”によって相互監視ができないことが一因となっている。

ルールが明確でないことは、過ちを生みやすい。そして、それを許容する土壤が醸成されかねない。さらに過ちを装った捏造も起こりうるだろう。また、ルールがないために、大多数の正しいサイエンティストすら、恐る恐る進んでいるようにも見える。特に研究を始めたばかりの若手サイエンティストに、どこまでがフェアでどこからがアンフェアなのかきちんと示すことは、正しいサイエンスのあり方の確立に重要であることは言うまでもない。

われわれの活動は、これらのルールを明確にするだけでなく、双方向的なディスカッションを行い、コンセンサスの形成につなげていこうとする全く新しいタイプの試みである。若手・中堅・シニアどの層からも広く意見を募り、活発な議論が展開され、それによって一層サイエンスの健全性が確保されることを願って止まない。

I. シンポジウムの概要

（座長：上田泰己、後藤由季子）

（※全文は分子生物学会の WEB サイトに掲載してありますので、そちらも是非ご覧下さい）

【第一部：講演】

本年度のシンポジウムの一つの方向性は、技術的な側面から正しい知識を若手研究者に配信することにより、誤りやミス（偽造）を減らすことによって最終的に故意の捏造を防ぐということである。まず山中氏による総論に引き続き、中山、水島、加藤がそれぞれの技術論について教育講演を行った。

実はこれらのネタは、当 WG メンバーが 2008 年から 2009 年にかけて「蛋白質 核酸 酵素（以下、PNE）」誌上において連載した『正しい知識が捏造を防ぐ — データを正確に解釈するための 6 つのポイント』というシリーズで、次頁の 6 つの平易で身近な論点につき解説を行ったものを下地としている。今回のシンポジウム参加者より「出版物として読みたい」というご意見を多数いただいたが、既に PNE の該当の巻号に、より詳細な記事が掲載してあるので、そちらも是非ともご覧いただきたい。

- 1)「Photoshopによるゲル画像の調整」中山敬一（PNE 2008年12月号）
- 2)「蛍光顕微鏡データの誤った解釈」水島昇、鈴木邦律（PNE 2009年2月号）
- 3)「客観的な判断の難しい事例をどう扱うか？—定量化的方法と代表例の選び方を主題として」齋藤成昭（PNE 2009年4月号）
- 4)「微妙なデータをどう表現するか—骨研究分野での実験データ解釈を例として」加藤茂明（PNE 2009年6月号）
- 5)「大規模データの解析における問題点—DNAマイクロアレイによる遺伝子発現量の測定を例として」山田陸裕、上田泰己（PNE 2009年8月号）
- 6)「分子生物学、生化学、細胞生物学における統計のポイント—医療統計学の専門家を交えた鼎談」山中伸弥、青井貴之、佐藤俊哉（PNE 2009年10月号）

山中 伸弥（京都大学）

「科学的不正とは？—その定義と問題点—」

不正行為の三大不正行為は、FFP（Fabrication（捏造）、Falsification（改竄・偽造）、Plagiarism（盗用・剽窃））である。Fabrication（捏造）は、してない実験をしたかのように報告するというものであり、Falsification（改竄・偽造）とは実験はしているが、データを自分に有利になるように変更したものである。Plagiarism（盗用・剽窃）も最近米国では大きな問題になっている。不正行為は一緒に議論されることが多いが、このように意味が異なり、注意が必要である。その他に二重投稿、Gift authorship、なども不正行為に含まれる。間違ったデータを防ぐためには、一つの手法に頼らずに、二重三重のデータを積み重ねることが肝要である。

中山 敬一（九州大学）

「ゲル画像の修正はどこまで許されるのか？」

Photoshopの正しい使い方」

現在は機器の進歩により、ゲル画像の調整におけるシグナルレスポンスカーブの設定の自由度が増しており、それによる捏造や改竄が増えている。科学誌の投稿規定はかなり曖昧であり、オリジナルのデータを正確に反映すること、科学コミュニティの標準に沿うべきこと、が重要とされている。Photoshopは取り込んだデジタルデータを最終的に図にするときに多くの方が使用しているが、使い方を誤ると本来のデータが持つ情報とは異なるメッセージを与えることになり、慎重な使用が望まれる。大切なことは、画像調整の原理や本質を理解し、自分が何をやっているのかということを正確に把握することであり、「正しい知識があなたを救う」とはまさにそ

のようなことを指すのである。

水島 昇（東京医科歯科大学）

「顕微鏡データの誤った解釈」

抗体を利用した免疫染色がウェスタンブロッティングと異なる点是非特異的シグナルがどれほど大きいかわという情報が得られにくい点にある。個々の細胞が持つ自家蛍光に注意することが必要で、これは適切なコントロールを使うことによって普段は回避することができる。またある蛍光の別波長フィルターへの漏れこみも気を付けなければならない点である。また自動露光を使用すると知らず知らずに、誤ったデータが出てくる可能性がある。共凝集も問題になりやすい。やはり原理や本質を理解していないと誤ったデータを招くという例である。

加藤 茂明（東京大学）

「微妙なデータをどう表現するか」

ルシフェレースアッセイは種々のプロセスを経た増幅の結果であり、そのデータは大きな差がなければ、その結果にあまり意味はない。一方で骨量などは直接測定であり、わずか5%の変化であっても医学生物学的には大きな意味を持つ。このようにいろいろな実験手法に対してどのような解釈が適切かという情報はまちまちであり、個々の詳細については学会のポスターセッションにおける直接のディスカッションから得られることが多い。

【第二部：パネルディスカッション】

第二部では、当WGのメンバーである、上田泰己（理化学研究所）、上村匡（京都大学）、加藤茂明（東京大学）、後藤由季子（東京大学）、白髭克彦（東京工業大学）、中山敬一（九州大学）、水島昇（東京医科歯科大学）、山中伸弥（京都大学）の8名によるパネルディスカッションを行った。今回のパネルディスカッションの特徴は会場の聴衆100名の意見をレスポンスシステムの使用によって、そのままりアルタイムに前方画面上に映し出したことである。回答は匿名なのでかなり本音に近い結果が得られると思われる。以下に質問とその回答結果を示す。

●質問1「あなたは自分のデータのこれまでの処理や解釈に自信がありますか？」

- | | |
|-----------|-----|
| ① 自信がある | 18% |
| ② 不安がある | 77% |
| ③ 間違いがあった | 15% |
| ④ わからない | 1% |

●質問2「あなたは所属機関でこれまでに研究ルールについてまとまった説明を受けたことがありますか？」

- | | |
|------|-----|
| ① はい | 22% |
|------|-----|

- ② いいえ 68%
- ③ おぼえていない 10%

●質問3「あなたの研究室には、自分の実験結果をラボの全メンバーに発表する機会がありますか？」

- ① はい 87%
- ② いいえ 12%
- ③ わからない 1%

●質問4「あなたの研究機関には、自分の実験結果を他のラボのPIや教員に相談できる制度がありますか？」

- ① はい 19%
- ② いいえ 61%
- ③ わからない 20%

●質問5「これまでに先行論文で報告されている実験を試みて、その実験結果が再現できなかったことはありますか？」

- ① はい 51%
- ② いいえ 28%
- ③ わからない 21%

●質問6「あなたは自分の周りで実際に科学的不正に気づいたことがありますか？」

- ① はい 35%
- ② いいえ 52%
- ③ わからない 13%

(追加質問)「①と答えた人限定：あなたが気付いた不正とは次のうちどれですか？」

- ① 捏造 3%
- ② 偽造・改竄 56%
- ③ それ以外 42%

●質問7「あなたは前任者から引き継いだ実験を行っています。しかし前任者の実験が再現できません。あなたならまずどうしますか？」

- ① 一人で頑張る 4%
- ② PIに報告する 70%
- ③ 同僚に相談する 25%
- ④ わからない 2%

●質問8「ある実験結果の解釈が、PIとあなたとでどうしても一致しません。あなたならどうしますか？」

- ① しかたなくPIの意見に従う 25%
- ② なんとかしてPIを説得する 9%

- ③ 面倒だけど新たな実験を組む 48%
- ④ 他の人に相談する 16%
- ⑤ わからない 2%

●質問9「ある雑誌にとっても大事な論文を投稿しました。査読結果が返ってきました。要求された実験を行った結果、投稿論文の主張と一致しません。あなたならどうしますか？」

- ① データを誰にも報告しない 2%
- ② 同僚やPIに相談する 88%
- ③ いさぎよく論文を取り下げるよう主張する 8%
- ④ わからない 1%

●質問10「科学的不正をへらすために何が最も有効だと思いますか？」

- ① 学部・大学院での教育を充実させる 26%
- ② PIの質を高める 16%
- ③ コミュニケーションの機会を増やす 49%
- ④ 科学的不正に対する罰則を強化する 9%
- ⑤ わからない 1%

以下、パネリストからの主な意見を抜粋する。

- ・科学的不正を防止するような教育をきちんとしている機関は少ない。
- ・ラボ全体で実験結果を共有するという基本的なことが行われていないラボが意外と多い。
- ・自分の周りで科学的不正に気が付いた人が35%もいたことはショックであった。この内容を精査すると、いわゆる捏造は少なく、偽造・改竄やその他の不正がほとんどであった。でも本当に偽造・改竄だったかというのは、かなりちゃんと調べないと分からない、勘違いもあったかもしれない。
- ・どのくらい普段からPIと風通し話せるかが重要。大事なことは、いかにきちんと実験ノート・記録を取っておくかだろう。
- ・まず一人でとことん頑張るという意見が少なかったが、これで将来自立してやっていけるか少々不安。
- ・PIと意見が食い違ったときには、一つの実験系ではなくて、複数の実験の結果を持って説得すべき。
- ・レフリーからのコメントは、結構次のステップに重要なサジェスションが多いので、それを同僚やPIに相談したり、ラボのセミナーで討論する雰囲気が大切。
- ・レフリーというのは必ず過大な要求をするものだが、それに反論するのが我々の務めだというふうに思っていたきたい。
- ・再現性を得られないということはよくあることで、再現性を得られないときに、不正だと決めつける傾向は、非常に怖いと思う。逆に再現性がない理由を突き詰め

ると意外な発見につながったりする。

- ・PIのトレーニングを行うようなシステムが必要ではないか。
- ・レビューというのは、研究者が嘘をつかないということ为前提に行われているので、完璧に嘘をつかれたらもうどうしようもない。それを防ぐためには全実験のデータを出すことも検討すべき。

II. アンケート結果

(アンケート回収数: 236名)

(回答は四捨五入で計算)

問1 あなたの年齢は？

- | | |
|----------|-----|
| ① 24歳以下 | 35% |
| ② 25～30歳 | 33% |
| ③ 30～34歳 | 14% |
| ④ 35～39歳 | 9% |
| ⑤ 40～49歳 | 7% |
| ⑥ 50～59歳 | 3% |
| ⑦ 60歳以上 | 0% |

問2 あなたの現在の身分・職階は？

- | | |
|----------------------|-----|
| ① 学部学生 | 15% |
| ② 大学院生(修士) | 23% |
| ③ 大学院生(博士) | 21% |
| ④ ポスドク | 7% |
| ⑤ 大学教員(助教・講師・准教授) | 15% |
| ⑥ 大学教員(教授) | 3% |
| ⑦ 研究員 | 10% |
| ⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上 | 0% |
| ⑨ その他 | 5% |

問3 あなたはPI(Principle Investigator: ラボの主宰者)ですか？

- | | |
|-------------|-----|
| ① はい | 7% |
| ② いいえ | 89% |
| ③ 場合による | 3% |
| ④ わからない・未記入 | 1% |

問4 このシンポジウムを何で知りましたか？(複数回答)

- | | |
|------------|-----|
| ① 学会ホームページ | 38% |
| ② ポスター | 9% |
| ③ 学会会報 | 32% |
| ④ 会場内の広告 | 4% |
| ⑤ 「実験医学」広告 | 2% |
| ⑥ 他人に聞いた | 9% |
| ⑦ その他 | 6% |

問5 研究計画や実験結果を記録する「実験ノート(ラボノート)」を使用していますか？

- | | |
|-------------------------|-----|
| ① ラボでルールを決めて使用している | 18% |
| ② ルールはないが、各自書き方に気を付けて使用 | 54% |
| ③ 使用しているが、書き方は気にしていない | 23% |
| ④ 使用していない | 4% |

問6 実験ノートの書き方や管理について、不明点・疑問点をお教え下さい

(主な意見の抜粋)

- ・書き方がわからない
- ・どこまで詳しく書けばいいのかわからない
- ・どんなノートを使うべきか？ルーズリーフはダメなのか？
- ・統一的なフォーマットがない
- ・自分のルールで十分なのかがわからない
- ・他人がわかるかが不安
- ・第三者によるサインの必要性が疑問
- ・実験ノートの管理・保管について疑問が多い

問7 このシンポジウムの感想をお教え下さい。

- | | |
|--------------|-----|
| ① とても面白かった | 68% |
| ② まあまあ面白かった | 25% |
| ③ 普通 | 2% |
| ④ あまり面白くなかった | 0% |
| ⑤ つまらなかった | 0% |
| ⑥ その他・未記入 | 5% |

問8 今年から開催時間を夜間からランチョンへ変更しました。どうでしょうか？(複数回答)

- | | |
|----------------|-----|
| ① ランチョン形式がよい | 86% |
| ② 夜間(18時以降)がよい | 11% |
| ③ その他・未記入 | 3% |

問9 今年は精神論的なものから、より具体的な方法論をテーマにしましたが、いかがでしょうか？(複数回答)

- | | |
|-------------------|-----|
| ① 具体的な方法論がよい | 74% |
| ② もっと本質的な議論がよい | 8% |
| ③ 時間が短くなっても両方とも必要 | 14% |
| ④ 未記入 | 4% |

問10 今年新たに導入した『聴衆参加型レスポンスシステム』はいかがだったでしょうか？

- | | |
|------------|-----|
| ① 有効だった | 81% |
| ② あまり意味はない | 7% |
| ③ その他・未記入 | 12% |

問11 今まで3年間にわたり、このような活動を続けてきましたが、効果はどうでしょうか？

- ① 大いに効果がある 35%
- ② 多少効果はある 46%
- ③ あまり効果は感じられない 6%
- ④ 全く効果はない 0%
- ⑤ 未記入 12%

問 12 今後このような試み続けるべきだと思いますか？

- ① 是非続けるべき 95%
- ② 続けるべきだが方法を変えた方がよい 3%
- ③ 止めた方がよい 0%
- ④ わからない・未記入 3%

問 13 ご意見・ご感想・今後取り上げて欲しいテーマ
など（一部抜粋）

【ご意見・ご感想】

- ・非常に面白いセミナーだった（同コメント計 6 件）
- ・このような教育的テーマは多くの方が求めているので、もっと時間を割いても良い
- ・ハッキリとした判断基準がこれまでなかったので大変参考になった
- ・意図しない不正が起きる危険性に気付けたので、若手だけでなく、科学者には時々このような教育が必要です
- ・とても身近な問題だったので今回のような話を続けて欲しい
- ・共通の認識が持てて勉強になった
- ・精神論に陥らないことが重要
- ・このセミナーはかなり有意義なプログラムだと思う
- ・学部生ですが、わかりやすく参考になる内容だった
- ・謙虚で丁寧な先生方ばかりでとても参考になった
- ・学会だけでなく、学校でもやって欲しい
- ・中山先生や山中先生の具体的な講演内容を一冊の本にして全員に配布するのが良い
- ・講演の PPT ファイルは学会ホームページにアップして欲しい
- ・Photoshop の所とか非常に参考になると思うので、資料を紙で配布して頂きたかった
- ・是非、今回の結果を外に発信して欲しい
- ・研究でお忙しい中、このような問題に取り組んで頂きありがとうございます
- ・教育が必要だ、ではなくリーフレットを作ろうなど、もっと具体的な解決策まで進めていく方がよい
- ・パネルディスカッションが適当かわからないが、ケーススタディ、報告書、啓発等は必須
- ・ネットを利用してシンポジウム前後に調査や疑問を提起したらどうか
- ・議論をまとめたものの公表を随時行い、より詳細な事例にも及ぶマニュアル的なものの作成につなが

ていけば非常に良い

- ・結論が「科学を愛する」で済ませてはいけない

【聴衆参加型レスポンスシステムについて】

- ・非常に面白かった（同コメント計 3 件）
- ・他のテーマでも使用して欲しい
- ・眠たくならなくてとても良いと思う
- ・実体を知るためには良いと思うが、個人的にはもっと議論したかった
- ・レスポンスの人数（110 人）が少なすぎた
- ・全然意味がない
- ・クリッカーが配布されず残念だった（同コメント計 8 件）

【開催形式について】

- ・もっと広い会場で開催して欲しい（同コメント計 7 件）
- ・会場が狭かった／小さかった（同コメント計 3 件）
- ・会場に人が入りきらなかった
- ・整理券を配布して欲しい（同コメント計 3 件）
- ・1 時間以上前から並ぶ必要があった
- ・午前のシンポジウムに出ていた人の中には、並ばずに諦めた人も多いと思う

【今後取り上げて欲しいテーマ】

- ・研究室の運営や指導法
- ・ラボの風通しを良くする方法（ワンマンラボの改善）
- ・若手研究者による指導方法（現場レベルで）
- ・新人 PI のトレーニングコース
- ・若手の会の助教の先生とトーク
- ・再現性

Ⅲ. アンケート結果に対する分析

- 1) 今回のシンポジウムは過去 2 回の形式を大きく変更した。まず、なるべく精神論を避け、具体的な方法論にテーマを絞ったこと、開催時間を夜間からランチオンへ変更したこと、聴衆参加型レスポンスシステムを導入したこと、が主な変更点であった。参加者は予想をはるかに上回り、多くの方から「参加したかったが入場できなかった」との苦情が寄せられた。例年に比べて予期せぬ大幅な参加者増は、嬉しい誤算とはいえ、かなりの混雑・混乱が見られたことは大きな反省点である。そこで参加できなかった人のために、内容については全文のテキストデータを本学会 WEB サイトにて、また第一部の講演の動画は㈱羊土社の WEB サイトにて公開している。
- 2) 参加者年齢は 30 歳以下が 78%と昨年の 2 倍以上になった。逆に中堅～シニアクラスの参加者が非常に減った。理由の一つは、問題をかなり具体的なテ

マにしたので、実際に実験を行っている若者が多く集まったということである。もう一つの理由は、恐らく開場前に長蛇の列ができていたことによって、中堅～シニアクラスの研究者が敬遠したことが挙げられよう。

- 3) 身分・職階については、昨年・一昨年に比べて学部生が15%と大幅に増えた。大学院生(修士・博士)が44%とほぼ倍増し、ポスドク・助教・准教授クラスが半減、教授・主任研究者クラスは激減した。これをPI・non-PIで分けると、PI:non-PI = 1:9程度であり、かなり若手に偏った参加となった。本シンポジウムの目標の一つにはPIの教育も含まれているため、もう少し中堅～シニアクラスの参加が望まれるので、次年度からは会場の広さを考慮するなど、中堅～シニアクラスにも配慮する必要があるだろう。
- 4) シンポジウムに対する感想では、「とても面白かった」が68%(昨年40%、一昨年46%)、「まあまあ面白かった」と併せると93%を占めた。今年は新しい試みが大変好評を拝したと思われ、啓発活動としては大きな成功であったと言えよう。
- 5) シンポジウムの開催時間については、例年ポスターと重複するなどして、かなりの苦情が寄せられていたので、今年は思い切ってランチョン枠を確保した。これは86%の参加者からの支持を得た。
- 6) 聴衆参加型レスポンスシステムは今年初めて導入したが、80%以上の方から有効だったとの評価を得た。ただレシーバーを無料で貸与してもらったので、100台ちょっとが限度であり、もっとレシーバーを配って欲しいという意見が多数聞かれた。来年もまた同じシステムを導入するなら、もっと多くのレシーバーを用意するように努力したい。
- 7) このような取り組みを続けるべきかどうかという問いについては、「是非続けるべき」が95%(昨年は65%、一昨年は80%)と驚異的な支持率を得た。これほど多くの学会員がこのような取り組みを支持していることを根拠に学会・年会執行部に対してより一層の支援をお願いしていくつもりである。

IV. 科学的不正防止に関する今後の若手教育のあり方について

私達WGは、過去3年間にわたって科学的不正に対する若手教育のあり方について討議を重ねてきた。本質や理想を大切にしつつも、単なる精神論で終わらぬよう、常に心に戒めを抱いて活動を行ってきた。昨年までは本質論・精神論を中心にシンポジウムを行ってきたが、昨年より少しずつ具体論にも踏み込むべく舵を切り始めた。まず、PNE誌上で『正しい知識が捏造を防ぐ—データを正確に解釈するための6つのポイント』というシリーズの連載を開始し、2009年年会ではシンポジウムを大きく革新して技術論を中心とした企画としたが、これらには予想を超える大きな反響があった。やはり車の両輪のように、本質と現実が大切であることを痛感させられた。

なお、本シンポジウム開催にあたり、全面的にご支援下さった岡田清孝理事長、小原雄治年会長、いつもわれわれの活動に対して適切で親身なご助言を下さる柳田充弘研究倫理委員長および同委員の皆様にご感謝申し上げます。また福田博氏・並木孝憲氏をはじめとする学会事務局の方や峰崎愛氏・内田知孝氏をはじめとする年会事務局の方には格別のご協力をいただきました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

(追記) 2009年末をもって、山中伸弥・加藤茂明、そして私(中山敬一)の3名はWGを退任することになりました。私などが座長を務めるのは僭越ではありましたが、やるからには最高の成果を出したいという思いから、日本で最も多忙な研究者に多くの負担をかけることになったことは本当に心苦しい限りでした。私はこのような次世代リーダーと目される方達が(多忙な時間の合間を見つけて)真剣に議論している姿を若者に見せることこそが何よりの若手教育だと信じて、この方針を立てました。しかしWGのメンバーは誰一人として傍観者的な方はおらず、常に積極的にこの問題に関与していただいたこと、さすがに一流の科学者の見識は違うと感じた次第です。本当に感謝に堪えません。どうも有り難うございました。2010年からは水島新WG座長の体制の下、益々この問題に対して議論を深め、より具体的な方策を立てられるものと思います。今後とも本WGの活動に関する会員諸氏のご理解とご協力を切にお願いする次第です。

第 32 回日本分子生物学会年会・男女共同参画企画ランチョンワークショップ開催報告

第 32 回年会において男女共同参画企画ランチョンワークショップ「女性リーダーが増えるには何が必要か～「制度改革」だけでは変わらない現状をふまえて～」を開催した（平成 21 年 12 月 9 日（水）11:45~13:00、パシフィコ横浜会議センター。企画：男女共同参画委員会、世話人：杉本亜砂子・漆原秀子）。会場は約 220 名の参加者で満席となった。ワークショップおよびアンケート結果概要について以下に報告する。なお、ワークショップ全文、ワークショップで用いた資料およびアンケート結果は分子生物学会 Web サイトに掲載した（http://www.soc.nii.ac.jp/mbsj/gender_eq/ws2009.html）。いずれも極めて興味深い内容なので是非ご覧いただきたい。

I. ワークショップ概要

【第一部】イントロダクション「日本分子生物学会における男女共同参画の現状」

杉本亜砂子（男女共同参画委員長／理研 CDB）

第一部では、日本分子生物学会における男女共同参画の現状についての数値データを紹介した。日本の科学技術分野全体では女性研究者は 13% にすぎず、先進国では最低レベルである。分子生物学会の女性会員は 24.6%（学生会員 33.8%、一般会員 19.9%）であり、科学技術分野全体の平均よりは高いものの、役員（理事・幹事）の女性比率は 5.3% と低い点が課題である。役員の女性比率に関しては、次回の理事選挙から理事定員 30 名のうち最低 3 名を女性とすることが前回の理事会で承認され、今後の改善が期待できる。

また、今回の年会ではじめて行った年会演題発表者の属性調査結果についても報告した。ポスター発表者の女性比率は 28.8% で学会員の女性比率と同等であったが、ワークショップスピーカー（13.4%）やシンポジウムスピーカー（8.9%）の女性比率は、30 代～50 代の幅広い年代にわたってポスター発表者の女性比率よりも顕著に低いことが明らかとなった。ワークショップ・シンポジウムのオーガナイザーの女性比率はそれぞれ 8.3%、7.1% とさらに低水準となる。今回の調査からは、スピーカーやオーガナイザーとなる女性が相対的に少ない理由は明らかではないが、年会のワークショップやシンポジウムにおける女性会員の活躍が今後増えていくことを期待したい。演題発表者の属性調査を継続することで今後の推移を見守りつつ、対策についても引き続き検討していく予定である。

最後に、本学会員に対するアンケート調査結果の中から、研究室主宰者（PI）志望者率の男女差に関する数値

データを紹介した（データ出典：第 2 回バイオ系専門職における男女共同参画実態の大規模調査の分析結果）。「将来の理想の職は」という問いに対して、男女ともに 80% 以上は研究職志望であり性差はほとんどないが、そのうち PI 志望者は女性は 32.7% であるのに対して男性は 65.2% と 2 倍近い開きがあり、PI を目指すかどうかの「意識」に男女差があることが示された。これらのデータをふまえて、第二部および第三部の議論をおこなった。

【第二部】講演「男女間の昇進格差はなぜ発生するのか？」

大竹文雄（大阪大学 社会経済研究所 教授）

第二部では、大竹文雄氏に、昇進の男女間格差について経済学的な視点からご講演いただいた。男女の昇進格差としては、1) 経営者や管理職による差別、2) 体力差による生産性格差、3) 学歴格差、4) 離職率の差に伴う企業特殊訓練の差、5) 女性に不利な職場慣行・職場環境、6) 昇進競争・リスクへの態度の差、などの理由が考えられている。特に、6) に関する最近の研究について詳しく紹介された。

昇進競争に参加するかどうかを決める要因としては、1) 競争そのものに対する好み、2) 自信過剰の程度、3) 危険回避度、4) フィードバック回避度（勝ち負けの結果を知られることを嫌う度合い）が挙げられる。これらに男女差があるという研究結果が最近報告されている。一般に、女性よりも男性の方が自信過剰であり、男性の方が競争好きだということがわかってきている。その結果、昇進競争に参加する男性比率が高くなることで、管理職の男性が多くなることが説明できる。さらに、大竹教授の阪大での研究から、競争する相手の男女比によって自信過剰の程度に違いが出ることが明らかになった。男性は女性がいないと自信過小になり、女性は男性がいないと自信過剰になる傾向がある。この競争選好の性差は、生物学的影響（性ホルモンなど）と文化的影響の双方に依ると考えられる。

最後に、理系分野で女性リーダーを増やすための 3 つの対策が提示された。第一に、管理的研究者の差別観をなくすこと。これを実現するためには業績評価を厳しくすればよく、結果として差別的研究室は衰退するはずである（男女の能力は基本的に同等なはずなので、女性の割合が少ないということは能力の低い男性をより多く雇用していることになるため）。第二に、女性研究者が不利にならないような体制（労働環境や育児支援）を整備することである。第三に、昇進競争への選好の性差についての対策である。この性差が文化的な理由で生じてい

るのであれば、教育で修正が可能なはずである。また、女性中心の研究グループを作ったり、採用に女性枠を設定することで競争環境をゆるめることも、政策の方向性としてあり得る。

【第三部】 パネルディスカッション「将来に向けて：女性リーダーを増やすための戦略」

パネリスト：

大竹文雄（大阪大学 社会経済研究所 教授）

山本正幸（東京大学大学院理学系研究科 教授）

鳥居啓子（University of Washington Professor）

島田純子（科学技術振興機構）

コーディネーター：杉本亜砂子（理化学研究所 CDB）

第三部では、大竹文雄氏に加えて、山本正幸氏、鳥居啓子氏、島田純子氏に登壇していただき、第一部・第二部をふまえて女性リーダーを増やすための戦略についてのパネルディスカッションを行った。以下に主なトピックと各パネリストの意見の要約を示す。

＜大竹文雄氏の講演に対して＞

- ・生物学的な男女差は存在するが、それを強調しすぎるのはかえって危険であり、結局は個人個人を見て対応していかなければならない。（山本）
- ・女性の多い自分の研究室では、個々のメンバーは競争好きではないが、チームとしての競争力や効率は非常に高い。（鳥居）
- ・共学高校と女子大に通った自らの経験から、女性のみで集団で女性のリーダーシップが育ちやすいことを実感した。（島田）

＜アメリカと日本の育児環境の違い＞

- ・アメリカの大学の育児施設はさほど整っているわけではなく、保育園の費用もポストドクの手取りの8割がそれで飛んでしまうくらい高い。しかし、子どもを非常に大事にする社会であり、子育てを応援してくれる雰囲気がある。子どもを職場に連れてくるのは普通に見られる光景であり、社会のトレランスが日本とは違う。（鳥居）

＜女性 PI が増えない理由＞

- ・能力が同じであれば男性と女性はイコールに扱うという意識は定着している。しかし、教授人事などでは応募してくる女性は数えるほどしかない。（山本）
- ・科学技術振興機構（JST）の「さきがけ」の女性応募者は1割程度いるが、CRESTでは2－3％程度しかない。JSTからは、評価が同等であれば女性を採用するように選考委員会に働きかけているが、応募者比率よりも採択者比率を高くするのは難しい状況である。（島田）

- ・教授等の採用の場合には、応募者の女性比率やマイノリティー比率の数値を公開することになっている。「同等の能力だったら女性を採用」というのは、おそらくアメリカではもう行われていないが、最終面接に女性やマイノリティーを加えるような努力を行っている。（鳥居）

＜夫婦の雇用＞

- ・家庭を持っている女性研究者は、家族と別の都市の公募には応募しにくいのではないかと。アメリカではかなり積極的に夫婦の雇用（spousal hire）を推奨している。（鳥居）
- ・そのようなシステムがあれば良いと思うが、日本の大学ではそのようなことの決定権が誰にあるかすらはっきりしておらず、非常に難しい問題である。（山本）

＜女性 PI を増やすための対策＞

- ・JSTではCRESTやさきがけのようなファンドの中で女性研究者を増やす働き掛けをしている。募集要項には、男女共同参画の観点をふまえて募集・審査を行うというメッセージを掲載している。「なでしこキャンペーン」では、CRESTやさきがけなどのファンドの中での女性研究者の活躍の様子をWeb上でロールモデルとして示すことで、女性の後進に続いてもらいたいと考えている。同程度であれば女性を採択するように選考委員には依頼している。その結果、徐々に女性は増えているが、画期的な増加とはなっていない。（島田）
- ・JSTのプロジェクトに参加している研究員が出産・子育てなどのライフイベントに遭遇した場合には、研究補助員の雇用や実験の外注などに使える300万円ほどの研究費を出すという試みを行っている。研究代表者本人にライフイベントが発生した場合には、代理を立てるか研究期間を延長するということが可能になっている。（島田）
- ・全米科学財団（NSF）では2001年から女性教官の増加を推進するためのADVANCEプログラムが作られた。これは大学組織レベルの改革をするためのファンディングであり、自分が所属するUniversity of Washingtonにも2001年から2007年まで約3億円の資金が投入された。プログラムとしては、女性研究者のメンタリングシステムや、女性教員向けのセミナー開催、ライフタイムイベントが生じた人に対してファンディングを出すプログラム（Transitional Support Program；TSP）などがある。自分の場合は、第一子出産後にポストドクを雇用する際にTSPの援助を受けた。夫もTSPの援助を得ることで講義が免除され、研究と子育てに集中できた。（鳥居）

＜意識改革の方策＞

- ・女子中高の場合は女性がリーダーシップを採る機会が

多くなる。中高生のころにリーダーシップをとったことのある人は、大人になっても所得が高かったりリーダーになっているという研究結果がある。女子校でなくても女性にリーダーシップを取らせる教育をしていけば、女性リーダーが育成されるのではないか。(大竹)

・女性に限らず、引っ込み思案になっているというケースはかなりあると感じる。応募者に育児などの理由で研究期間のブランクがあれば、採用する側もそれを勘案した上で応募者の能力を判断している。業績が少ないことが説明できる理由があるのであれば、それを書いた上で応募するなどの工夫をしたらよいと思う。(山本)

・大学院生として山本教授の研究室に所属していた際にありがたかったのは、男子学生も女子学生もまったく同じ教育方針で指導されたことである。また、少しずつ高いハードルに挑戦する機会を与えられたことで、競争やストレスのかかる状況に対する耐性が徐々に作られたと感じている。女性はストレスに弱いから仕事を任せない、というのではなく、本人を成長させるような仕事を指導者が与えていくことも必要なのではないか。(杉本)

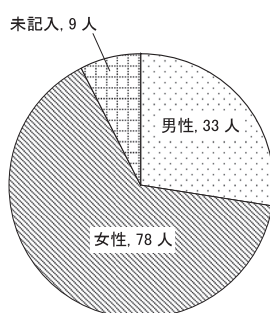
・女性研究者といっても一人一人違うので、もっと人数が増えていろいろな成功の道筋があるということが見えてくるのが理想的だと思う。(鳥居)

・事業仕分けの対象になったが、科学技術振興調整費の女性研究者育成モデル育成・加速プログラムを国がしたからこそ、大学が変わる気になった、大学を変える力になったという話を聞く。JST もその流れに乗ってやっていきたい。国が動けば大学も変わる。国を動かすのは研究者の皆さんの声なので、一緒に変えて行ければと思う。(島田)

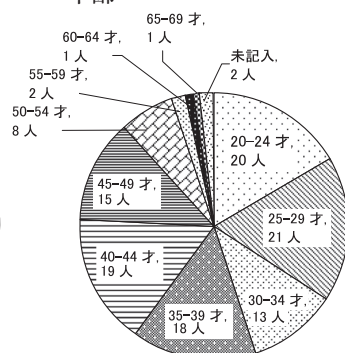
Ⅱ. ワークショップ後のアンケート集計結果

< 1 > 回答者の属性

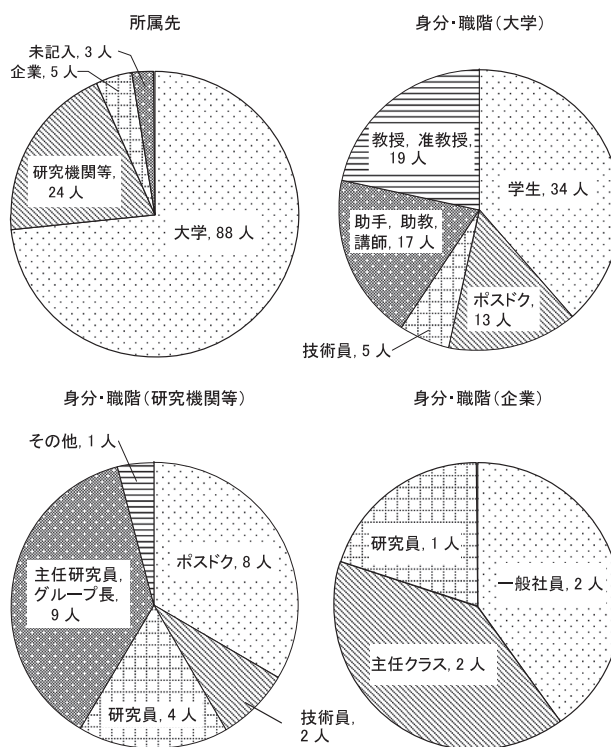
・性別



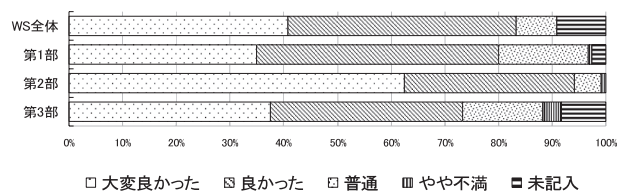
・年齢



・身分・職階



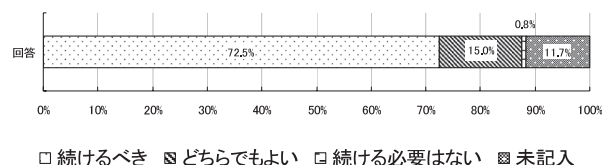
< 2 > 今回のワークショップの感想をお教えてください。



(自由記述の概要)

リーダー志望意識を扱った点、実験データが示された点が斬新であり、意識の改革が必要であることを認識したという感想がほとんどであった。女性の意識改革が必要という意見が男性からも女性からもあった点は特筆すべきである。一方、女性PIが増えることが本当に必要なのかという問いかけも含めて、多面的な分析の必要性を指摘する意見があった。また、ワークショップ自体の改善希望として、年齢や立場等、より多様なパネリストやフロアからの意見が出せる時間を望む声があった。

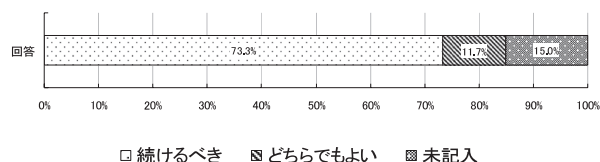
< 3 > 本年会では演題発表者の属性調査をはじめに行いましたが、今後もこのような調査を続けるべきだと思いますか？



(自由記述の概要)

調査の継続を希望、調査結果によって現状が理解できたという評価、調査結果を今後の施策に反映できるようにすべき、などのポジティブな意見がほとんどであった。

< 4 > 今後も年会において男女共同参画ワークショップを行うべきだと思いますか？



(自由記述の概要)

分子生物学会年会企画としての継続を望む意見が多かったが、市民講座や他の学会との共同開催等、実施形態に対する提案もあった。今後取り上げて欲しいテーマとしては、「女性リーダー」、「意識改革」、「統計データ」等、今回のワークショップの内容を深める、あるいは発展させる内容と、「家庭との両立」、「経験談」、「セクハラ問題」等、具体的で身近な問題に関するもの多数があげられていた。

< 5 > 今後、男女共同参画委員会で行って欲しい事業やイベント等があれば教えてください。

(自由記述の概要)

政治的・社会的な対外的活動の提案に加え、女性研究者と話す会、女性リーダー養成教育、就職支援等の具体的に身近なサポートを望む声が多かった。

< 6 > その他、ご意見がありましたらご自由にお書き下さい。

(自由記述の概要)

職場環境や社会に対しての要望、ロールモデルの重要性、特にPIになりたいとは思わないという意見等、実にさまざまな記述があった。

この項目に限らず、記述の全て、特にニュアンスまではとうていまとめられていないので、是非ともウェブページの全文を読んでもいただきたい。ワークショップの反響から企画の意図が十分に伝わったと考えられ、また、今後の活動に役立つ貴重な意見が多かったが、最も印象的だったのは記述の多様性であった。既成概念だけにとらわれず、研究現場の現状を正しく把握した活動が必要であることが改めて認識された。

Ⅲ．今後の年会企画について

アンケート回答者の73%が年会ワークショップの継続を積極的に支持していることから、今後もアンケート回答などを参考にテーマを絞り、新たな企画を考えていきたい。また、今回はじめて行った年会演題発表者の属性調査についても73%が継続すべきと考えており、経時的数値データに基づいた分析と対策を期待する声が多く聞かれた。次回年会は生化学会との合同開催であるため生化学会との調整が必要であるが、演題発表者の属性調査は続ける方向で検討したい。

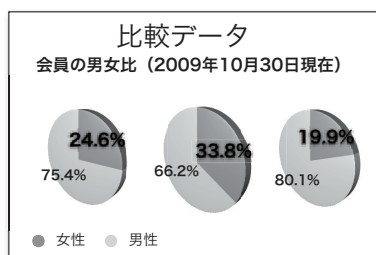
(文責：杉本、漆原)

日本分子生物学会年会における発表者の属性統計

～年会における女性のactivity向上を目指して～

”学会のシンポジウムでの発表者やオーガナイザーの女性の比率は
学会員全体の女性の比率と比べて低いのではないだろうか？”

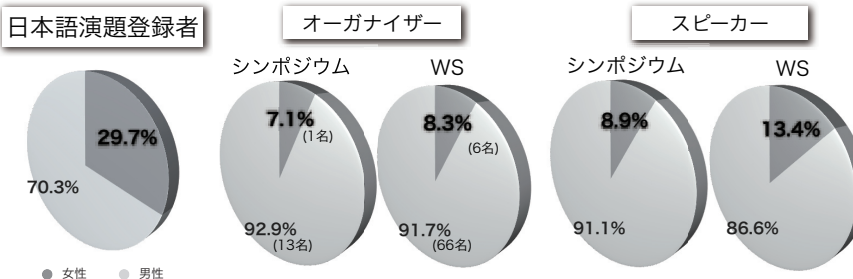
日本分子生物学会男女共同参画委員会はこのような疑問をもち、2009年度から年会発表者の
演題カテゴリーごとの属性調査を経年的に行うことにしました。



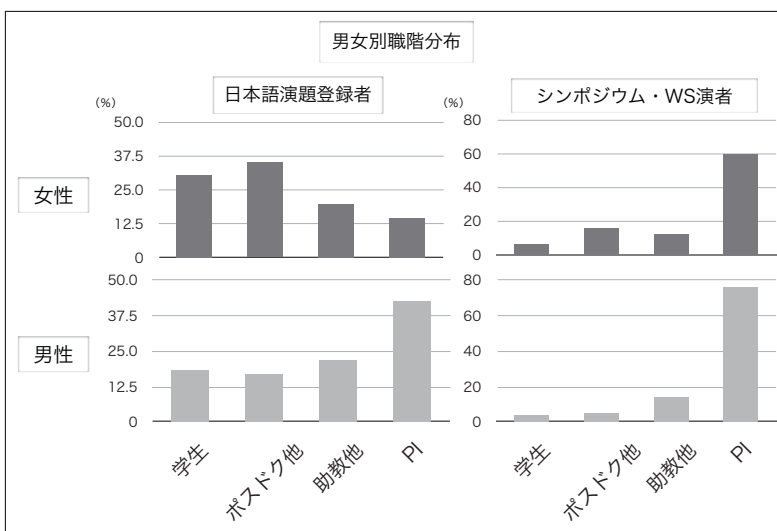
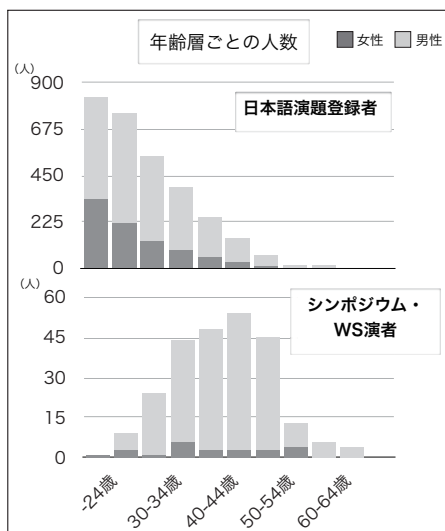
シンポジウム・WS
演者の女性率は、学会員
全体の女性率に比べて
低い

登録者数	回答数 (回答率)	シンポジウム	ワークショップ (WS)
日本語演題登録者数 3552名	オーガナイザー 14/34名 (41.18%)	72/114名 (63.16%)	
	スピーカー 45/112名 (40.18%)	157/246名 (63.82%)	

集計結果 1 (男女比)



集計結果 2 (年齢層分布と男女別職階分布)



まとめ

今回の調査結果は当初の疑問を裏付けるものであり、女性の積極的な参画を呼びかけ続ける必要性が示唆された。

女性はより若い世代の活躍が示唆された。今後シンポジウム・WSのオーガナイザー、スピーカーへの、男女を問わず若い世代の応募・登用を呼びかけることが、年会における女性のvisibilityを上げることにもつながるのではないだろうか。

今回の調査ではシンポジウム・WSの演者についての回答率が低かったという問題点がある。その大きな要因として年齢層についての回答を演者から得ることの困難さが多くのオーガナイザーから指摘された。継続的でより意義のある調査結果を得るためには、来年度以降の調査方法について再検討する必要がある。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第16期第3回理事会記録

日 時：2009年12月8日(火) 15:00～19:00

場 所：パシフィコ横浜 会議センター 5階「511 + 512」

出席者：岡田清孝（理事長）、町田泰則（副理事長）、荒木弘之（第32回副年会長兼）、上村 匡（編集幹事兼）、大隅良典、加藤茂明（広報幹事兼）、小安重夫、篠崎一雄、篠原 彰、白髭克彦、杉本亜砂子、田畑哲之、辻本賀英、永田恭介、正井久雄、升方久夫、水島 昇、山中伸弥、山本正幸、渡邊嘉典、小川智子（監事）、石野史敏（庶務幹事）、小林武彦（集会幹事）、宮園浩平（集会幹事）、小原雄治（2009年会長）、以上25名

欠席者：鍋島陽一（副理事長）、相沢慎一、饗場弘二、審良静男、貝淵弘三、影山龍一郎、片山 勉、塩見春彦（会計幹事兼）、長田重一、柳田充弘（Genes to Cells 編集長兼）、吉川 寛（監事）、谷口維紹（第33回年会長）、花岡文雄（第34回年会長）大隅典子（2010春季シンポジウム世話人）、以上14名

事務局：福田 博（記録）、並木孝憲、丸田夏子

関係議題参加者：峰崎 愛（第32回年会事務局より）

本理事会成立について：

石野史敏庶務幹事より、理事20名、監事1名、幹事3名、議題関係会員1名が出席し、委任状11名（理事10、監事1）を受理しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について：

岡田清孝理事長より、議事録署名人として、水島昇理事と渡邊嘉典理事が指名され、承認された。

議 事：

議事に先立ち、岡田理事長より第7期会長 三浦謹一郎会員の訃報（本年9月21日ご逝去）につき報告がなされ、黙祷を奉げた。

1. 報告事項

1) 庶務報告（理事長報告、庶務幹事報告）

・会員現況

石野史敏庶務幹事より、2009年12月1日現在の会員数につき以下のとおりに報告がなされた。

名誉会員 1名

正 会 員 10001名（海外在住含む）

学生会員 5206名（海外在住含む）

賛助会員 35社

合 計 15243名（前年12月対比、－57）

昨年同時期に比べ57の減であるが、年会会期中に、例年100名ほどの学生会員の入会があるので、会員数としては概ね横ばいである。

・第16期理事会の任期について

岡田理事長より本理事会の任期について以下の説明があり、承認された。

— 第16期理事会任期 —

＜当初の考え方＞事業年度/会計年度に合わせ、役員の任期は10月1日～翌年9月30日とされていた。

●第16期理事会の任期：2008年10月1日～2010年9月30日（2年間）

＜経緯＞第15期理事会において、2007年6月に法人に移行（東京都の認証）、その後、2008年10月より第16期理事会へ移行した。理事は投票により選任され、監事は2008年12月の総会にて選任・承認された（定款第14条より）。総会記録、会計報告、新役員の住民票等を一式添付のうえ、東京都への事務手続きを経て、2009年1月15日付にて役員登記、さらに決算書類に準拠し資産総額の登記が終了した。

（※ 東京都の考え方 / 今後の本会の対応・取り扱いにつき、行政書士に相談し、以下の説明を受けた）

『分子生物学会は、通常総会の開催時期が12月であるので、今後も2年に1度の理事会交代の際の実質的な登記変更は1年半ばとなる。定款にある理事の任期2年は、登記から2年を越えてはならない、といった法務上の解釈となるので、第16期理事会の実質的な担当任期を2010年12月末日までとし（3カ月の任期延長）、第17期理事会任期を2011年1月1日～2012年12月31日とすることが望ましい。したがって今後、役員の任期は1月1日～翌年12月31日の2年間となる。これは現定款の運用範囲内での適用であり、定款変更は必要としない。』

＜特別移行措置＞役員変更登記の法務手続きに合わせるための特別措置として、第16期理事会の任期を3ヶ月延長して、

●第16期理事会の任期（特別移行措置）：2008年10月1日～2010年12月31日

とすることが承認された。

・科学技術予算に関する緊急対応について

行政刷新会議の事業仕分け評価への理事会対応であるが、偶然にも 11 月 21 日に将来計画検討委員会開催があり、執行部は同委員会の協力を得て、このたびの緊急案件に対処することとなった旨、岡田理事長より報告があった。

11 月半ばに学会単独（理事長と第 32 回年会長の連名にて）および多くの学協会との連名の形で、事業仕分けに対する意見表明（要望書提出）を行った。さらに、11 月 25 日には会員一斉メール配信を行い（アンケート期限：11 月 29 日）、会員からの意見を集めた。石野庶務幹事、篠原 彰将来計画検討委員、杉本亜砂子同委員の 3 氏にアンケート編集担当の作業を依頼し、提出された意見の事業番号別仕分け・編集作業を行なった。全アンケート記録は、12 月 4 日に学会 HP に掲載されているが、寄せられた意見の量（印刷ページ）の関係から、ほぼ 1/3 を選ばせてもらい、印刷版資料を作成した（冊子資料：緊急フォーラム当日配布）。

引き続き、岡田理事長より、緊急フォーラムの開催準備状況の説明がなされた。

○科学技術予算に関する緊急フォーラム

「事業仕分けから日本の未来の科学を考える」

日時：12 月 9 日(水) 19:00 ～ 20:30

会場：第 32 回年会／第 3 会場（パシフィコ横浜 会議センター 3 階 302）

企画概要／趣旨：

本年 11 月に開催された新政府の行政刷新委員会による事業仕分けは、結果的に、“学術・科学技術”の分野に深い爪痕を残した。日本分子生物学会は単独および学会連合などを通じて、事業仕分けに対する反対アピールを出してきたが、事態は未だ不透明である。問題はいくつかあるが、新政府が科学政策に対する明確な方針を示さないまま事業仕分けを行なったこと、仕分け作業自体も民主主義国家で行なわれたことが信じられないほど粗雑で乱暴なものであったことにあると思われる。

事業仕分けにおける“討論バトル”自体は、一般国民に高い好感度をもって評価されたと聞いているが、しかし、我々が心配していることは、事業仕分けで出された結論がそのまま実行されることになれば、日本における“学術・科学技術”の発展を大きく損ない、国家に多大な損失を与える取り返しのつかない内容となることである。

そこで本学会は、年会初日である 12 月 9 日

に緊急フォーラムを開催し、文部科学省（パネリストは研究振興局ライフサイエンス課長 石井康彦氏、研究振興局学術研究助成課 企画室長 山下恭徳氏）、新政府からもご出席をいただき（最終的に民主党からの出席者はなく、後藤 斎政務官のメッセージを石井課長が代読された。）、学会員との建設的な話し合いから事態を正常化させたいと強く願っている。科学者がどのように国家政策に関わって行くべきかを考える絶好の機会でもあり、健全な科学の発展のために科学者の取るべき行動についても議論をしたい。

同フォーラムの司会進行は石野庶務幹事、アンケート結果の概要説明は篠原委員、パネリストとして、石井課長、山下企画室長、小原雄治 第 33 回年会長、理事長の 4 名が壇上に上がる予定である。同フォーラムは、けっして文科省との対立の場でなく、会員との建設的な対話を含め、現在の混乱を收拾するとともに将来の新しい方向性を築くために、「文科省、政府と協調した新しい科学政策立案へ向けての制度作り」および「科学者から国民へ向けたメッセージ」の重要性を確認する場としたいことが岡田理事長より報告された。

2) 第 7 回日本分子生物学会三菱化学奨励賞選考結果報告

田畑哲之賞選考委員長より、標記奨励賞候補として 7 件の応募があり（同 7 件のほか、取り下げ 1 件、返却 1 件あり）、委員会による審査・選考の結果、以下の 2 名が受賞者として決定したことが報告された。

○稲葉謙次（九州大学生体防御医学研究所 特任准教授）

【研究題目】

（和文）細胞品質管理に関わるタンパク質ジスルフィド結合形成・開裂因子の構造基盤の確立

（英文）Structural basis of protein disulfide formation and cleavage factors involved in protein quality control in the cell

○小松雅明（東京都臨床医学総合研究所 副参事研究員）

【研究題目】

（和文）健康と病態における選択的オートファジーの先駆的研究

（英文）In-depth analysis of selective autophagy in health and disease

3) 各種学術賞、研究助成候補への学会推薦状況について

田畑賞推薦委員長より、2009年に本学会より推薦した各種学術賞について報告がなされた。引き続き、町田泰則研究助成選考委員長より、2009年の研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。

4) 石野庶務幹事(大隅典子世話人代理)より、第10回(2010年)春季シンポジウムの開催概要の報告がなされた。

- ・テーマ「分子を語る、分子で語る」
- ・会期：2010年6月7日(月)～8日(火)
- ・会場：ホテル松島大観荘(宮城郡松島町)
- ・定員：300名

第10回春季シンポジウムは、第1回以来となるスクール形式(1泊2日)で開催する。学生やポスドクなど若手に多く参加してもらい、ともに学びながら活発な議論のできるシンポジウムとなるよう企画を進めている。プログラム内容は、基調講演2題(東大先端研センター 菅 裕明氏、東北大 山本雅之氏)とワークショップを予定している。前日の6月6日には、仙台市博物館にて市民公開講座を開催する。公開講座の講演は片桐秀樹氏(東北大)と岡野栄之氏(慶應大)に依頼している旨報告された。

5) 小原雄治第32回年会長より配布資料に基づき準備状況の報告がなされた。一般演題投稿数は3741題(うちLate-breaking abstracts投稿は135題)、事前参加登録は6219名となり、順調に準備が進んでいる。学部学生(参加費無料)の事前登録が579名あった。経済状況を反映して、展示企業の小間数は直近の単独開催年会より減り441小間となり、バイオテクノロジーセミナー(ランチョンセミナー)も昨年(BMB2008)の15減で23枠となった。

新しい試みであるITの積極活用(講演要旨集のオンライン化・同メニューは携帯電話にも対応)については、概ね予定どおりに進めることが出来た。オンライン要旨は11月20日(金)より利用を開始し、2010年3月末まで閲覧可能とした。要旨集の会期終了後の一般公開については要旨内容の充実を考慮して、今回、一般公開は見送ることとした旨報告があった。

ポスター発表/討論においては、ディスカッサー制度(約400名のPIにディスカッサーを依頼)を導入し、「Meet the Symposists」企画など、議論できる機会を設けたことの報告がなされた。

例年の年会に比べて海外演者招聘補助を充実させ、各シンポジウムには若手PIを中心とした複数

の外国人演者を招聘した(シンポジウム54名、ワークショップ25名)。国際性の向上を目標に、要旨の英文執筆推奨を実施し、シンポジウムは要旨・講演ともに英語で統一し、一般演題においても英文執筆を推奨した結果、投稿された演題の英文執筆率は55.5%であった(BMB2008では14.6%)。

6) 宮園浩平集会幹事(谷口維紹第33回年会長代理)より第33回(2010年)年会につき報告がなされた。

- ・名称：第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会 合同大会
- ・略称：BMB2010 (Biochemistry and Molecular Biology 2010)
- ・会期：2010年12月7日(火)～10日(金)の4日間(12月11日(土)に東京にて市民公開講座を開催予定)
- ・会場：神戸ポートアイランド(全21の講演会場+ポスター会場、展示会場)
- ・組織委員：

第33回日本分子生物学会年会

年会長 谷口維紹

庶務幹事 宮園浩平

幹事補佐 武田弘資、宮澤恵二

第83回日本生化学会大会

会頭 田中啓二

庶務幹事 水島 昇

幹事補佐 石原直忠、反町洋之

このほか全国の約20名の方にプログラム委員を委嘱中

・プログラム案

①プレナリーレクチャー

現役で活躍する比較的若手の研究者に講演いただく。海外演者・国内演者の2つのレクチャーを二会場(ポートピアホール、会議場メインホール)で各日同時開催とする。

②シンポジウム

4日間を通して最大72テーマのシンポジウムを開催する。年会長企画シンポジウム、プログラム委員企画シンポジウムを柱に、残った開催枠に公募採択企画を当てはめる。(*後日、12月12日開催の第3回準備会議にて、会員より公募する企画はワークショップと位置付けることに変更。ただし内容によってシンポジウムとして採択する可能性もある。)

③一般演題

ポスター発表および一般口頭発表演題として7月に募集する。

④市民公開講座

「病気の原因を見つけその克服を目指す生命科

学(仮)」をテーマとして、年会翌日の12月11日(土)午後1時に東京で開催する。

⑤その他のプログラム

マスターズレクチャーやフォーラムを企画予定。詳細は今後検討する。

・その他

要旨集の作成型態(印刷冊子、CD-ROM、オンライン等)は今後検討する。会計体制は従来を踏襲することとし、両学会の案分は従来通り、分生6:生化4とすることとした。

7) 永田恭介理事(花岡文雄第34回年会代理)より第34回(2010年)年会につき報告がなされた。

- ・会期:2011年12月13日(火)~16日(金)の4日間
- ・会場:パシフィコ横浜
- ・年会長:花岡文雄
- ・組織委員:永田恭介(委員長)、菅澤 薫、三浦正幸、柳澤 純

今年の第32回年会の開催実績をふまえ、魅力ある年会となるように、今後、学術企画を検討していきたい。来年1~2月に、第1回準備会議を開催し、具体的な準備作業に入る予定である旨、永田理事より報告された。

8) 上村 匡編集幹事より学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。

・収支報告について

出版契約の改定後、初めてとなる収支報告(2008年)がなされ、学会誌発行に掛かる学会の収支が大幅に改善された。約2,400万円の出版利益を本学会と出版社とで1,200万円ずつ折半した。編集経費(GTC編集事務局に関わる費用や編集長への謝金)についても、800万円を上限に立替精算が可能となったことが収支改善に寄与している(オンライン費用は従来と同様、年額435万円を出版社に支払った)。

・編集体制等について

新たに設置された「Genes to Cells 将来計画ワーキンググループ」の第1回会合を3月31日に名古屋で開催し、著者負担による論文オープンアクセスの選択肢を設けること、投稿規定の見直しを図ること、編集委員の大幅な入れ替えを行うことなどを活発に議論した。その後、出版社とも協議を重ね、出版から半年を待つことなくオープンアクセスに設定可能な「Online Open」を9月中旬に導入した。また、投稿規定の改定および以下のとおりに編集委員の追加を行った。

○新編集委員(2009年6月~) 50音順、敬称略
小室一成、塩見春彦、篠原 彰、白川昌宏、白髭克彦、濡木 理、平岡 泰、宮脇敦史

○新編集委員(2010年1月~) 50音順、敬称略
飯野雄一、上田泰己、上村 匡、影山龍一郎、倉田のり、五島剛太、後藤由季子、小林武彦、近藤 滋、佐谷秀行、杉本亜砂子、杉本慶子、須田年生、多田 高、永田和宏、永田恭介、原田慶恵、本間道夫、正井久雄、松崎文雄、松本邦弘、三浦正幸、米田悦啓

- ・引き続き、配付資料に基づき、Online 投稿数一覧、各年月別投稿数、国別 Accept & Reject 率、購読地域(国)別の購読数(購読形態別)につき、詳細説明がなされた。投稿減少の状況が続いており、理事各位には是非とも協力をお願いしたい。レビューについては見開き4ページ程度でよいので、是非とも積極的な投稿をお願いしたいとの依頼がなされた。

・Genes to Cells 将来計画WGから賞推薦委員会への検討依頼事項2点について

①本年4月、GtC 将来計画WGより賞推薦委員会へ「分子生物学会三菱化学奨励賞の受賞者には、受賞対象となった研究成果を中心に『総説』にまとめてもらい、必ず、Genes to Cells に発表してもらうこととする。賞推薦委員会の賛同を得られれば、募集要項にその旨を盛り込んでほしい。」との検討依頼がなされた。賞推薦委員会で検討した結果、「分子生物学会三菱化学奨励賞受賞者にGenes to Cells 誌への総説発表を義務づけることに限らずに特に異論はない。」との結論になったことが田畑賞委員長より報告された。本件については、審議事項5.にて、募集要項(規定兼)変更を確認することとなった。

②上記同時期にGtC 将来計画WGから賞推薦委員会あてに「論文投稿、特に総説の投稿を促すための2つめの方策として、分子生物学会が推薦する各種の(各財団の)学術賞受賞候補の推薦に関して、過去(一定期間に)、Genes to Cells に論文あるいは総説を発表している研究者を対象(条件)としたらどうか。」との提案がなされた。賞推薦委員会で検討し(2009.5)、「Genes to Cells 誌への論文掲載を賞推薦の条件とすることについては、各賞が個々に異なる背景をもつことから、学会推薦に際して今回のような一律の最低基準を設けることは適切ではない。」との意見が多数を占めたことが田畑賞委員長より報告された。本理事会においても上記賞推薦委員会の考え方を支持することが確認された。

ちなみに、研究助成(学会推薦)に関しては、すでに下記ルールが運用されており、会報やHPで広報されている。

○研究助成（学会推薦）に関する留意事項

『学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請する。』

—— 参考 ——

『学会推薦 / 研究助成決定者への学会誌投稿に関する研究助成選考委員会申し合わせ』

1. 学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請する。
2. 上記は、要請であって強制力はないが、学会として可能な限り協力頂けるよう、対象者に理解を求めるものとする。
3. 会報（研究助成一覧の下）とホームページ（該当コンテンツ）に、上記 1. を掲載し広報に努めることとする。

2009 年 6 月 10 日、第 16 期研究助成選考委員会において、上記を日本分子生物学会研究助成選考委員会の申し合わせ事項とした。同委員会（委員長）の任期交代期には、学会事務局が新委員長にその内容を申し送ることとする。

—————

- 9) 杉本亜砂子男女共同参画委員長より、年會初日の 12 月 9 日、ランチョンワークショップ「女性リーダーが増えるには何が必要か〜「制度改革」だけでは変わらない現状をふまえて〜」が開催されるので、理事各位においてもぜひ参加してほしいとの要請がなされた。また、同委員会において、シンポジウムでの発表者やオーガナイザーの女性の比率は学会員全体の女性比率と比べて低いのではないだろうか。との疑問が提示され、今年初めて、年會発表者の演題カテゴリーごとの属性調査（男女比、年齢層分布、男女別職階分布）を行ったことが報告され、その属性統計資料が配付された。同資料は会場内の複数の場所で配付し、さらに広報ポスターが掲示される予定であることが報告された。同属性調査については経年的にデータを取ることが重要であり、来年以降も年會組織委員会に協力（Web 投稿画面に属性調査のための項目を設置する必要がある）を求めることとした。
- 10) 水島 昇理事（中山敬一若手教育問題ワーキンググループ座長代理）より、年會 2 日目の 12 月 10 日、今年はランチョンセミナー形式で、「若手教育ランチョンセミナー 2009 あなたのデータは大丈夫？正しい知識があなたを救う！」が開催されることが

報告された。第一部では 4 名の演者による、より具体的な方法論についてのレクチャーを行う。第二部は、WG 委員全員がパネリストとなり、参加者の意見をそのままりアルタイムで表示できるレスポンスシステム（クリッカーを先着約 100 名に配付予定）を導入して、相互討論ができる企画となっていることが報告された。

11) 学術事業企画委員会報告（学会創立 30 周年記念出版事業）

岡田理事長からの委嘱を受けて、本年 2 月、学術事業企画委員会が設置されたことが永田理事から報告された。3 月と 8 月に委員会を開催しており、その他、必要に応じてメール会議を行い、出版企画作業を進めている（第 3 回委員会を 12 月 10 日開催予定）。委員会構成は次のとおりである。

学術事業企画委員会：永田恭介（委員長）、伊藤耕一、稲田利文、入江賢児、塩見春彦、島本 功、菅澤 薫、中尾光善、林 茂生、三浦正幸、渡邊嘉典

委員会で検討した初期段階においては、分子生物学会 30 周年として出版する意義（分子生物学の根本、研究の歴史とその意義、自分たちの未来を語る）を盛り込んだ形で、ニーズや目的等が異なる年代（読者対象）別シリーズ（4 冊）にしたらどうかとの企画が練られた。年代別シリーズごとのコンセプト（ストーリー、コンテンツ、メッセージ）をつめていき、企画原案を作成した上で、6～7 月にかけて、委員長と事務局で出版社各社と面談を行った。9 月以降、出版社との交渉を重ねた結果、4 巻すべてを 1 つの出版社から発行することには、出版社側の営業企画・採算上も難しい点があり、最終的に以下の 2 社に分けての 4 巻の刊行を目指すこととなった。

○東京化学同人との出版企画（3 シリーズ）

刊行の趣旨：分子生物学会 30 周年を記念し、本会の歴史、業績、社会貢献などを周知するとともに、若い人々の生命科学に対する興味を喚起して、今後の我が国の分子生物学、生命科学の発展に資するため、以下 3 冊（A. B. C.）の出版を企画。

- A. “分子生物学を築いた 15 人”（仮称） 対象は大学生、大学院生、研究者。歴代理事長クラスの方々へのインタビューから原稿を起す。2010 年 12 月の刊行を目指す。
- B. “生命科学への招待”（仮称） 生命系諸学科をめざす高校～大学 1、2 年を対象とした教科書。2011 年 9 月の刊行を目指す。
- C. “なぜなぜ生物学”（仮称） 対象は中高生、大学生、一般向けの読み物。2010 年 12 月の刊行を目指す。

以上の A. B. C. はそれぞれ独立の単行本とするが、

共通のロゴを使用するなどして、3冊が分子生物学会の出版事業であることがわかるようにする予定である。本の体裁・サイズ・コンテンツの中身と執筆者、等々につき作業を進めていく予定である旨永田委員長より説明がなされた。企画内容について出席者より感想や意見が出され、原案どおり、同委員会にて出版企画を進めていくことが確認された。

○学習研究社とのタイアップ出版企画「まんがでよくわかるシリーズ」について

上記A. B. C. に続く対象年代別の企画として、学研（交渉窓口：学研メディカル秀潤社）とのタイアップ企画となる、小学生を対象とした「まんがでよくわかるシリーズ“生命のひみつ”（仮題）」について、永田委員長より詳細報告がなされた。この学研のシリーズはすでに46タイトルが出版されており、全国約23500の小学校、および3000の公立図書館を通して、子供たちにダイレクトに伝えられる啓発図書となっている。ただし本企画を実行に移すには、スポンサーを募り3000万円の協賛金を集める必要がある。その対応として、特定の企業のみには頼るのではなく、コンソーシアム方式（仮称：日本分子生物学会 創立30周年記念出版事業・支援企業グループ）で、1口50万円で寄付金を募る方法案と趣意書案が配付され、詳細説明がなされた。同時に、永田委員長からは昨今の経済状況のこともあり、来年、再来年の年会収支（企業展示、広告、ランチョンセミナー等）に影響が出ることは避けなければならない、との補足説明も行われた。

検討の結果、本企画を実施に移すに際しては、慎重な判断が求められることが確認され、同まんがシリーズ企画につき、当面、1年ほど実行を保留にしたかどうかとの意見が多数を占めることとなった。この結果を受けて、明日開催予定の学術事業企画委員会で再検討することとなった（最終的に委員会においても1年見送りとすることが確認された）。

12) 将来計画検討委員会報告

昨年12月開催の理事会において「学会のあり方（学会の将来像）」についての議論があり、学会の将来像についてきちんと議論すべき時期に来ている、との認識の確認がなされていた。その後、岡田理事長からの委嘱を受けて、将来計画検討委員会が設置されたことが山本正幸理事より報告された。委員会構成は次のとおりである。

将来計画検討委員会：山本正幸(委員長)、荒木弘之、
篠原 彰、杉本亜砂子、
水島 昇、宮園浩平

（同会合には原則、オブザーバとして、岡田理事長と石野庶務幹事も参加）

9月13日に第1回委員会を開催し、第2回会合は11月21日、そして本日、理事会開催前の11:30～14:00に第3回会合を行ったことが山本委員長より報告された。第2回会合では、行政刷新会議の事業仕分け評価への理事会对応の案件が重なり、本委員会が実質的に執行部を補佐する形をとることになったことが報告された。

本委員会に課せられた検討課題は次のとおりである。

①基礎科学の現状認識とそれに対する学会の役割について

②国際対応について

③社会との関わり

④男女共同参画の推進(女性理事をいかに増やすか)

⑤理事選挙投票率を高める問題

⑥年会のあり方（開催スタイル、年会収支の確認、年会長と理事会との責任分担、等々）

3回の会合による検討の結果、山本将来計画検討委員長より、以下の中間報告(提案を含む)が行われた。

・①および②の基礎科学の現状認識とそれに対する学会の役割について / 国際対応について：委員会では、春季シンポジウムのあり方・国際化について、様々な視点からの検討を行い、その結果、同春季シンポジウムの国際化を提案したい、との説明がなされた。本件については、審議事項8. にて、討議することとなった。

・③社会との関わり：高校への出前授業等を調査しており、学会として、高校との連携や協力ができないものか検討中である。

・④男女共同参画の推進(女性理事をいかに増やすか)：委員会で検討した「細則(役員の選出)ならびに選挙管理委員会内規の変更(案)」を、審議事項6. として提案したい。

・⑤理事選挙投票率を高める問題：HPやメール配信利用により積極的な選挙公報を行うことが確認されている。

・⑥年会のあり方(開催スタイル、年会収支、年会長と理事会との責任分担・・・他学会との合同開催の問題の全責任を年会長一任のままとしていよいのか)：本件については、委員会における検討状況の報告も含め、審議事項9. にて検討することとなった。

検討課題については、しかるべき時期までに委員会答申が出せるように活動を行っていく予定である旨、山本委員長より報告された。

13) その他

・『蛋白質核酸酵素（PNE）』について

山本理事（PNE 編集幹事）より PNE 編集委員会の議事録（部分版）が配布され、PNE 休刊の経緯などについて報告がなされた。復刊を考えた場合、PNE 編集委員会としては、紙媒体ではなく、オンラインジャーナルとしての復刊が現実的であると考えている旨報告がなされた。

学会の規模、財政的状況、自前の和文誌を持たないこと、また現 PNE 編集委員が全員、分子生物学会に関係していることを考え合わせると、PNE 編集委員会としては、分子生物学会に PNE オンラインジャーナル化のサポートを検討してもらうのがよいとの結論に至った。

しかし、現在までに発行元である共立出版の態度がはっきりしないため、本理事会においては、分子生物学会のサポートの可能性について協議してほしい、との依頼が山本理事より提出された。

自由討論に入り、様々な意見が出された。PNE がカバーしてきた研究分野は非常に幅広く、復刊の意義がある。社会的意味があるのならば 500 円程度の会費値上げも受け入れられる。この時期に和文誌（総合レビュー誌）を保有することに意味があるだろうか。オンラインであれば非会員は課金にし、Web 広告の可能性もある。等々、活発な意見交換がなされた。

会員にとってどのようなメリットがあるか、コストはどの程度かかるか等につき、PNE 編集委員会でさらなる検討を行ってもらい、同時に出版社の状況を見ながら、学会として迅速に対応できるようにしておくこととなった。1 月以降、新たな動きになった場合、山本理事から岡田理事長あてに報告をもらい、メール会議等で理事会対応していくことが確認された。

・通常総会 / 議事進行と報告担当者の確認

石野庶務幹事より、第 32 回通常総会資料についての説明がなされ、総会当日の議事進行ならびに報告担当者の確認がなされた。

2. 審議事項

1) 2009 年度（平成 21 年度）収支決算承認の件

塩見春彦会計幹事欠席のため、会計幹事代理として事務局（福田 博）より 2009 年度（平成 21 年度）会計の収支について説明がなされた。黒字決算となったポイントは、①年会会計（BMB2008 決算の分子生物学会負担分の収支繰入）と② Genes to Cells に関する大幅な収支の改善、の 2 点にあり、

個々の事業の収支について詳細説明がなされた。春季シンポジウムについては、収入約 153 万円に対し支出 697 万円で 544 万円の持ち出しではあるが、従来も年会で剰余金を出して会計全体の中で春季シンポジウム費用を捻出しているため、想定内の収支状況である。

本決算において、法人として初めて消費税 152 万円を納めたこと、その他の税務処理については、顧問契約（税務顧問を含む）を交わしている税務専門家の指示のもと、収益事業部分の法人確定申告も行ったことが報告された。本決算は、10 月 30 日に宮城秀敏公認会計士の監査を受け、配付資料のとおりに監査報告書が提示されている。

財務諸表一式の説明がなされた後に、小川智子監事より、11 月 16 日、吉川 寛監事とともに学会事務所にて会計監査会を実施し、金融機関の残高証明書等を一式確認、21 年度決算を認めたことの報告がなされた。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第 32 回通常総会に諮られることとなった。

2) 2010 年度（平成 22 年度）収支予算ならびに事業計画承認の件

塩見会計幹事の代理として事務局より 2010 年度（平成 22 年度）の収支予算案、事業計画につき説明が行われた。

審議の結果、同収支予算ならびに事業計画は理事会で承認され、第 32 回通常総会に諮られることとなった。

3) 定款変更の件

岡田理事長より、本議案に関する経緯（平成 20 年 12 月、都の条例（特定非営利活動促進法施行条例）が改正され、総会における欠席者の表決権（委任状）につき電磁的方法が認められるようになった。）につき報告がなされた。法人移行後は毎年、総会成立のための委任状取りまとめ作業に苦慮しており、今後は、表決権（委任状）に E メールが利用できるように、以下の定款変更が提案された。

審議の結果、定款変更（第 24 条第 3 項、第 28 条第 2 項、第 29 条第 1 項）は理事会で承認され、第 32 回通常総会に諮られることとなった。[* 来年度の総会から適用予定]

■電磁的方法の追加について

条文	(変更後の案)	(現行の定款)
第 24 条 第 3 項	3 総会を招集する場合には、会議の日時、場所、目的及び審議事項を記載した書面又は電磁的方法により、開催の日の少なくとも 5 日前までに通知しなければならない。	3 総会を招集する場合には、会議の日時、場所、目的及び審議事項を記載した書面により、開催の日の少なくとも 5 日前までに通知しなければならない。
第 28 条 第 2 項	2 やむを得ない理由により総会に出席できない正会員及び名誉会員は、あらかじめ通知された事項について、書面又は電磁的方法をもって表決し、又は他の正会員及び名誉会員を代理人として表決を委任することができる。	2 やむを得ない理由により総会に出席できない正会員及び名誉会員は、あらかじめ通知された事項について、書面をもって表決し、又は他の正会員及び名誉会員を代理人として表決を委任することができる。
第 29 条 第 1 項	総会の議事については、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。 (1) 日時及び場所 (2) 正会員及び名誉会員総数及び出席者数（書面又は電磁的方法による表決者若しくは表決委任者がある場合にあっては、その数を付記すること。） (3) 審議事項 (4) 議事の経過の概要及び議決の結果 (5) 議事録署名人の選任に関する事項	総会の議事については、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。 (1) 日時及び場所 (2) 正会員及び名誉会員総数及び出席者数（書面表決者又は表決委任者がある場合にあっては、その数を付記すること。） (3) 審議事項 (4) 議事の経過の概要及び議決の結果 (5) 議事録署名人の選任に関する事項
附則	この定款は、東京都より定款変更認証を受けた平成 年 月 日から施行する。	

4) 細則変更の件（副理事長選任に関する条文の整備・一部修正）

岡田理事長より細則第 4 条 2) につき、以下のとおり細則変更が提案され、承認された。

○特定非営利活動法人 日本分子生物学会 細則

第 2 章 役員の選出

第 4 条

新理事長が副理事長の設置を希望した場合、次の各号に掲げる方法により、新副理事長 2 人以内を選任することができる。

- 1) 新理事長は新理事を招集し、新理事の互選により新副理事長を選出する。ただし、新理事長は投票を行うより前に、選任する新副理事長の定数を明確にするものとする。
- 2) 投票は 1 人 1 票、無記名による単記とし、得票者中の上位の者を新副理事長として選任する。このとき、同位の場合には抽選により決定する。
- 3) 副理事長は理事を兼ねるものとする。

↓

(修正案)

- 2) 投票は、設置される副理事長の人数に相当する投票を無記名で行うこととし、得票者中の上位の者を新副理事長として選任する。このとき、同位の場合には抽選により決定する。

5) 日本分子生物学会三菱化学奨励賞・募集要項（規定兼）変更の件

石野庶務幹事より、報告事項 8) ①の討議を受け、標記賞の募集要項に、下記のとおり、8. を追加することが説明され、本理事会において承認された。

8. 受賞業績の会誌掲載

受賞者は、受賞対象となった研究成果を中心に総説にまとめて、学会誌 Genes to Cells に発表するものとする。

6) 細則（役員の選出）ならびに選挙管理委員会内規変更の件

（女性理事をいかに増やすか、女性理事枠の設置 / 運用）

岡田理事長より、報告事項 12) ④ 将来計画検討委員会からの提案に至る経緯につき説明がなされ、続いて、山本将来計画検討委員長からも委員会での検討内容報告がなされた。審議の結果、提案を一部修正のうえ、細則第 2 条に条文 5) を追加、改正することが承認された。

○特定非営利活動法人 日本分子生物学会 細則

第 2 章 役員の選出

第 2 条に、下記 5) を追加、改正。

第 2 条

理事は、次の各号に掲げる方法により選出する。

- 1) 理事長は、正会員の中から 3 名を選出し、選挙管理委員を委嘱する。選挙管理委員により構成する選挙管理委員会は選挙事務を行う。
- 2) 投票は 1 人 1 票、無記名による 10 名連記とし、別に定める方法により投票を行う。
- 3) 得票者中の上位の者より順に 30 名を選出す

る。ただし、同数得票者については選挙要項に従い順位を定める。

4) 理事は3期連続して選出されることはできない。この制限に抵触する者の氏名は選挙要項に公告される。

5) 時限特別措置（17期－19期までの6年程度）として、理事定員30名の10%（3名）の女性理事枠を設ける。選挙により3名の女性当選者が選出されなかった場合は、女性理事が最低3名になるまで調整を行う。ただし、理事定員30名に変更はないものとする。

同時に、「理事選挙に関する選挙管理委員会内規」にも同内容を追加事項（時限特別措置）として付記することとなった。追加事項の文面は、将来計画検討委員会からの提案（文面）のまま、追加、改正された。

また、次回理事選挙における理事候補者参考リストの作成に当たっては、女性候補者を積極的にもちこむことが確認された。

7) Web版会員名簿（会員システム）について（公開項目設定の検討）

理事会メンバーから検討要請があった標記案件の討議に入る前に、まず、石野庶務幹事より、会員管理システムの機能と検討事項につき、詳細説明がなされた。

【会員管理システムの機能】

1. 登録情報確認・変更…学会に登録されている本人情報を確認・変更できる。
2. 公開情報設定…会員検索で公開する本人情報の項目を設定できる。
(名前、会員番号、会員種別は、非公開の設定ができない)
3. パスワード変更…会員管理システムにアクセスするためのパスワードを変更できる。
4. 会員検索・閲覧…学会に所属している会員の検索ができる。

(会員が「非公開」設定にしている項目は、検索・閲覧できない)

【検討事項】

● Web会員システムに移行した際の公開項目の初期設定は、・名前・名前カナ・名前ローマ字・会員番号・会員種別(正会員 or 学生会員)のみであった。さらにその後、会員からのアクセスが少なく(公開項目の設定をされる方が非常に少ない)、本来のWeb会員名簿が機能していない状況がある。

● 5000名を越える場合、個人情報保護法の対象と

なる事業所(団体)扱いとなり、また2007年当時は、個人情報保護法への対応に社会全体が慎重であったため(システム会社のアドバイスもあり)慎重に立ち上げた経緯がある。…初期設定(所属の名称、所在地、電話、FAX、Eメール)は可能な限り公開からスタートしたのではなく→原則、各項目・非公開からスタートし、本人が確認のうえ公開項目を設定してもらう方法をとった。

● ただし、あえて非公開の項目を多く設定している会員も見受けられる。(PIでも多数おられる)

● 公開項目(例:たとえば所属機関の名称、所在地、電話、FAX、Eメール)の初期設定を原則公開の方針に切り替える場合は、たとえば会報(2010年2月号)とHPで事前広報を行い、その後、適当な期日(例:3月10日)で所属データを一齐公開に切り替え、公開されたくない方は、再度、個々に非公開設定をしてもらう、といった方法が考えられる。

審議の結果、理事会の責任のもとに、2010年3月半ばに、Web版会員名簿(会員システム)の公開項目設定の運用ルールを変更し、初期設定で、○所属名称・部署 ○FAX ○Eメール の3項目を公開設定とすることが決定された。事前に会員あてに会報2月号と学会HPにて、上記内容を広報・周知することが確認された。

8) 第11回(2011年)春季シンポジウムについて

山本理事より、報告事項12)①②とも関連して、将来計画検討委員会での検討内容につき報告がなされた。

3度の委員会会合において、春季シンポジウムのあり方(国際化)について、様々な視点から検討を試みた。2001年当時の第1回春季シンポジウム開催に至るまでの経緯の確認も行っているが、来年で第10回目となり、一つの節目でもあるので、春季シンポジウムを国際シンポジウムにしたらどうかとの提案がなされた。引き続き、篠原理事(将来計画検討委員兼)からも追加説明がなされ、例えば、テーマを決めて地方で開催する、公募形式にする、などの方法案につき説明がなされた。国際化と地方の活性化をどのように両立していくか、また、国際シンポジウムにした場合の準備補助金の増額(現行、約500～600万円の持ち出しであるが、国際シンポジウムにした場合は800～1000万円を手当でする必要があるだろう)、企画を公募制にした際には、企画を選定する選考委員会も必要になってくる、等の種々の委員会内意見が報告された。

審議に入り、従来形式の春季シンポジウム(前日

の市民公開講座の開催も含めて) が果たしてきた役割は大きく、その目的は今でも非常に重要であるとの意見も多く出された。会員の少ない地域こそを春季シンポジウム開催候補地として大事にしてほしい、との意見も出された。

活発な討論の結果、今の時点ですぐに公募制(国際シンポジウム化)に切り替えるのではなく、第一段階としては、地方の活性化・啓発といったスタンスを保ちつつ、国際性も高めていく、といった方針で、2011 年春季シンポジウム世話人を選出していくこととなった。その人選は岡田理事長に一任された。

9) 第 35 回(2012 年) 年会について

第 35 回(2012 年) 年会の開催地としては、昨年 12 月の理事会で福岡開催(会場予約済)が決定しているが、年会長については調整中である旨、岡田理事長より報告がなされた。また、2012 年の年会開催に際して、過日、生化学会より合同開催申し入れの理事長あて手紙を受理したことが報告された。

年会長をどなたに依頼するかといった年次の個別の案件とは別に、ここ数年に亘り議論されてきた^{*}年会のあり方、については、将来計画検討委員会にその検討をお願いしているところである。

引き続き、山本理事より将来計画検討委員会における検討作業の途中経過につき報告が行われた。合同開催になった場合のメリット・デメリット、年会は誰のためにあるのか! 若手研究者・学生のためにあることを最重要に考えたい、等の意見が出され

ているが、もう少し時間をかけて、今年の第 32 回年会アンケート結果をも参考にし、来年(2010 年)の定例理事会までに、委員会としての答申をまとめたいとの報告がなされ、その後、自由討論に入った。

2012 年の福岡年会をどのようにすべきかについては、その対応として(経過措置として)、「2012 年の福岡年会については、年会長にすべてを一任するのではなく、理事会執行部がサポートする。」といった方針が決定され、年会長の調整を含め、岡田理事長に一任されることとなった。

10) 『Genes to Cells』次期編集長について

上村編集幹事より次期編集長についてはまだ決定に至っていないことが報告された。Genes to Cells 将来計画ワーキンググループとも相談しながら、至急、候補者調整を進めている状況である。次期編集長が決定される際には、併せて副編集長も同時に決定できるような考えもあることが報告された。

上記、第 16 期第 3 回理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2009 年 12 月 8 日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第 16 期第 3 回理事会

議 長	岡 田 清 孝	㊞
議事録署名人	水 島 昇	㊞
議事録署名人	渡 邊 嘉 典	㊞

特定非営利活動法人日本分子生物学会 平成 22 年度(第 32 回) 通常総会記録

日 時:平成 21 年 12 月 11 日(金) 11:30 ~ 12:15

場 所:パシフィコ横浜 会議センター 3 階
第 7 会場(311 + 312)

社員数(正会員+名誉会員):10001 名

出席者数:5149 名(本人出席 48 名、表決委任者 5101 名)

議事内容:

1. 岡田清孝理事長より開会の挨拶がなされた。
2. 定款第 25 条に基づき、岡田理事長より本総会議長として永田恭介会員が指名された。さらに定款第 29 条に基づき、議事録署名人として、中西 徹会員、升方久夫会員が選任された。
3. 永田議長より、定款第 26 条(総会の定足数)に基づき、上記表決委任者(委任状)を含めて出席 5149 名となり、本総会は成立する旨報告された。
4. 経過報告(事業報告)
 - 1) 理事長報告

・科学技術予算に関する緊急対応について

行政刷新会議の事業仕分け評価への本学会の対応であるが、11 月半ばに学会単独および多くの学協会との連名の形で、事業仕分けに対する意見表明(要望書提出)を行った。11 月 25 日には会員一斉メール配信を行い、会員からの意見を集めた。石野史敏庶務幹事、篠原 彰将来計画検討委員、杉本亜砂子同委員の 3 氏にアンケート編集担当の作業を依頼し、提出された意見の事業番号別仕分け・編集作業を行い、全アンケート記録は、12 月 4 日に学会 HP に掲載されている旨報告がなされた。寄せられた意見の量(印刷ページ)の関係からほぼ 1/3 を選ばせてもらい、印刷版資料を作成し、以下要領で開催した緊急フォーラムで配布を行った。

○科学技術予算に関する緊急フォーラム「事業仕分けから日本の未来の科学を考える」

日時：12月9日(水) 19:00～20:30

会場：第32回年会／第3会場

(パシフィコ横浜 会議センター 3階 302)

企画概要／趣旨：

事業仕分けにおける“討論バトル”自体は、一般国民に高い好感度をもって評価されたと聞いているが、しかし、我々が心配していることは、事業仕分けで出された結論がそのまま実行されることになれば、日本における“学術・科学技術”の発展を大きく損ない、国家に多大な損失を与える取り返しのつかない内容となることである。そこで、年会初日である12月9日に緊急フォーラムを開催し、文部科学省（パネリストは研究振興局ライフサイエンス課長 石井康彦氏、研究振興局学術研究助成課 企画室長 山下恭徳氏）と学会員との建設的な話し合いの場を設け、事態の正常化、科学者がどのように国家政策に関わって行くべきか、健全な科学の発展のために科学者の取るべき行動とは、等々につき議論を行ったことが岡田理事長より報告された。

・第35回（2012年）年会について

12月8日に開催された定例理事会において、第35回年会について審議されたことが岡田理事長より報告された。

第35回年会は、昨年12月の理事会で福岡開催（会場予約済）が決定しており、年会長については調整段階である。

2012年の年会長をどなたに依頼するかといった年次の個別案件とは別に、ここ数年に亘り理事会で議論されてきた“年会のあり方（開催スタイル、年会長と理事会との責任分担、他学会との合同開催の問題の全責任を年会長一任のままとしていてよいのか、等々）”については、将来計画検討委員会にその検討をお願いしている段階であり、同委員会において少し時間をかけて、来年（2010年）の定例理事会までに、委員会としての答申をまとめてもらうことになっている。

それに対して、個別の2012年福岡年会をどのようにすべきかについて、理事会で審議した結果、その対応としては（経過措置として）、「2012年の福岡年会については、年会長にすべてを一任するのではなく、理事会執行部がサポートする。」といった方針が決定されたことが報告された。今後、すみやかに年会長調整を進めていく予定である。

・第11回（2011年）春季シンポジウムについて

定例理事会において、春季シンポジウムのあり

方について話し合いが行われたことが、岡田理事長より報告された。まず、将来計画検討委員会において、春季シンポジウムのあり方、特に国際化について、様々な視点からの検討が行われた。国際化と地方の活性化をどのように両立していくか、また同時に、春季シンポジウムが地方の分子生物学の啓発に果たしてきた役割は大きく、会員の少ない地域こそ、春季シンポジウム開催候補地として大事にしてほしい、といった理事会内の意見もあることが報告された。理事会での討論をふまえ、地方の活性化・啓発といったスタンスを保ちつつ、国際性も高めていく、といった方針で、すみやかに、2011年春季シンポジウムの世話人を選出していく予定であることが岡田理事長より報告された。

・学会創立30周年記念出版事業について

第16期理事会において、学術事業企画委員会（永田理事に委員長就任を依頼）を設置し、標記出版事業を進めていることが岡田理事長より報告された。

続いて、永田学術事業企画委員長（総会議長兼）より以下の補足説明が行われた。

学術事業企画委員会構成：

永田恭介（委員長）、伊藤耕一、稲田利文、入江賢司、塩見春彦、島本 功、菅澤 薫、中尾光善、林 茂生、三浦正幸、渡邊嘉典

同委員会で検討した初期段階においては、分子生物学会30周年として出版する意義（分子生物学の根本、研究の歴史とその意義、自分たちの未来を語る）を盛り込んだ形で、ニーズや目的等が異なる年代（読者対象）別シリーズ（4冊）にしたかどうかとの企画が練られた。年代別シリーズごとのコンセプト（ストーリー、コンテンツ、メッセージ）をつめていき、同時に出版社各社との交渉を重ねた結果、まずは、以下の3シリーズの刊行が決定したことが報告された。

○東京化学同人との出版企画（3シリーズ）

刊行の趣旨：

分子生物学会30周年を記念し、本会の歴史、業績、社会貢献などを周知するとともに、若い人々の生命科学に対する興味を喚起して、今後の我が国の分子生物学、生命科学の発展に資するため、以下3冊（A. B. C.）の出版を企画。

A. “分子生物学を築いた15人”（仮称）対象は大学生、大学院生、研究者。歴代理事長クラスの方々へのインタビューから原稿を起こす。2010年12月の刊行を目指す。

B. “生命科学への招待”（仮称） 生命系諸学科をめざす高校～大学 1、2 年を対象とした教科書。2011 年 9 月の刊行を目指す。

C. “なぜなぜ生物学”（仮称） 対象は中高生、大学生、一般向けの読み物。2010 年 12 月の刊行を目指す。

以上の A. B. C. はそれぞれ独立の単行本とするが、共通のロゴを使用するなどして、3 冊が分子生物学会の出版事業であることがわかるようにする予定である。本の体裁・サイズ・コンテンツの中身と執筆者、等々につき作業を進めていく予定である。今後の原稿執筆依頼等につき、会員各位への協力依頼が永田委員長よりなされた。

2) 庶務報告

石野史敏庶務幹事より会員現況につき報告が行われた。

会員現況：〔2009 年 12 月 1 日現在〕 名誉会員 1 名、正会員 10001 名、学生会員 5206 名、賛助会員 35 団体、総計 15243 名

3) 編集『Genes to Cells』報告

上村匡編集幹事より学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。

・収支報告について

出版契約の改定後、初めてとなる収支報告(2008 年)がなされ、学会誌発行に掛かる学会の収支が大幅に改善された。編集経費についても、800 万円を上限に立替精算が可能となり収支改善に寄与した。

・編集体制等について

新たに設置された「Genes to Cells 将来計画ワーキンググループ」の第 1 回会合を 3 月 31 日に名古屋で開催し、著者負担による論文オープンアクセスの選択肢を設けること、投稿規定の見直しを図ること、編集委員の大幅な入れ替えを行うことなどを活発に議論した。その後、出版社とも協議を重ね、出版から半年を待つことなくオープンアクセスに設定可能な「Online Open」を 9 月中旬に導入した。また、投稿規定の改定、および編集委員の追加を行った。

・投稿減少の状況が続いており、会員各位には是非とも協力をお願いしたい。レビューについては見開き 4 ページ程度でよいので、是非とも積極的な投稿をお願いしたいとの依頼がなされた。

4) 将来計画検討委員会報告

岡田理事長からの委嘱を受けて、将来計画検討委員会が設置されたことが山本正幸将来計画検討委員

長より報告された。委員会構成は次のとおりである。将来計画検討委員会：山本正幸(委員長)、荒木弘之、

篠原 彰、杉本亜砂子、

水島 昇、宮園浩平

9 月に第 1 回委員会を開催し、第 2 回会合は 11 月 21 日、そして年会前日の 12 月 8 日に第 3 回会合を行った。第 2 回会合では、行政刷新会議の事業仕分け評価への理事会对応の案件が重なり、本委員会が実質的に執行部を補佐する形をとることになったことが報告された。

本委員会に課せられた検討課題は次のとおりである。

①基礎科学の現状認識とそれに対する学会の役割について

②国際対応について

③社会との関わり

④男女共同参画の推進(女性理事をいかに増やすか)

⑤理事選挙投票率を高める問題

⑥年会のあり方(開催スタイル、年会収支の確認、年会長と理事会との責任分担、等々)

現在、継続検討中の議案が多いが、④については、本委員会の審議結果(細則改正案)を理事会に提案し、12 月 8 日開催の定例理事会において、以下方法で、女性理事枠が設置されることが報告された。

—— 細則(役員の選出)変更 ——

第 16 期第 3 回理事会(12 月 8 日開催)において、細則第 2 条に条文 5) を追加、改正することが承認された旨、報告された。

○特定非営利活動法人 日本分子生物学会 細則

第 2 章 役員の選出

第 22 条に、下記 5) を追加、改正。

第 2 条

理事は、次の各号に掲げる方法により選出する。

1) 理事長は、正会員の中から 3 名を選出し、選挙管理委員を委嘱する。選挙管理委員により構成する選挙管理委員会は選挙事務を行う。

2) 投票は 1 人 1 票、無記名による 10 名連記とし、別に定める方法により投票を行う。

3) 得票者中の上位の者より順に 30 名を選出する。ただし、同数得票者については選挙要項に従い順位を定める。

4) 理事は 3 期連続して選出されることはできない。この制限に抵触する者の氏名は選挙要項に公告される。

5) 時限特別措置(17 期 - 19 期までの 6 年程度)として、理事定員 30 名の 10% (3 名) の女性理事枠を設ける。選挙により 3 名の女性当選者

が選出されなかった場合は、女性理事が最低3名になるまで調整を行う。ただし、理事定員30名に変更はないものとする。

- 5) 第10回(2010年)春季シンポジウムについて
大隅典子世話人(東北大学)より、標記シンポジウムの開催概要の報告がなされた。
- ・テーマ:「分子を語る、分子で語る」
 - ・会期:2010年6月7日(月)～8日(火)
 - ・会場:ホテル松島大観荘(宮城県松島町)
 - ・定員:300名

第10回春季シンポジウムは、第1回以来となるスクール形式(1泊2日)で開催する。学生やポストドクなど若手に多く参加してもらい、ともに学びながら活発な議論のできるシンポジウムとなるよう企画を進めている。プログラム内容は、基調講演2題(東大先端研センター 菅 裕明氏、東北大 山本雅之氏)とワークショップを予定している。前日の6月6日には、仙台市博物館にて市民公開講座を開催する。公開講座の講演は片桐秀樹氏(東北大)と岡野栄之氏(慶應大)に依頼している旨報告された。

5. 議 事

- 1) 平成21年度(2009年度)収支決算承認の件
塩見春彦会計幹事より21年度決算の収支内容に

つき詳細報告が行われた。本決算については、本年10月30日、公認会計士 宮城秀敏氏の会計監査を受けた(独立監査人の監査報告書を参照)。その後11月16日に、学会事務所において、小川智子監事、吉川 寛監事の監査を終了していることが報告された。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

- 2) 平成22年度(2010年度)収支予算ならびに事業計画承認の件

塩見会計幹事より22年度の収支予算案、事業計画につき説明が行われた。

審議の結果、同収支予算ならびに事業計画は異議なく承認された。

- 3) 定款変更の件

岡田理事長より、本議案に関する経緯(平成20年12月、都の条例(特定非営利活動促進法施行条例)が改正され、総会における欠席者の表決権(委任状)につき電磁的方法が認められるようになった。)につき報告がなされた。法人移行後は毎年、総会成立のための委任状取りまとめ作業に苦慮しており、今後は、表決権(委任状)にEメールが利用できるように、以下の定款変更が提案された。

審議の結果、定款変更(第24条第3項、第28条第2項、第29条第1項)は異議なく承認された。

■電磁的方法の追加について

条文	(変更後の案)	(現行の定款)
第24条第3項	3 総会を招集する場合には、会議の日時、場所、目的及び審議事項を記載した書面又は電磁的方法により、開催の日の少なくとも5日前までに通知しなければならない。	3 総会を招集する場合には、会議の日時、場所、目的及び審議事項を記載した書面により、開催の日の少なくとも5日前までに通知しなければならない。
第28条第2項	2 やむを得ない理由により総会に出席できない正会員及び名誉会員は、あらかじめ通知された事項について、書面又は電磁的方法をもって表決し、又は他の正会員及び名誉会員を代理人として表決を委任することができる。	2 やむを得ない理由により総会に出席できない正会員及び名誉会員は、あらかじめ通知された事項について、書面をもって表決し、又は他の正会員及び名誉会員を代理人として表決を委任することができる。
第29条第1項	総会の議事については、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。 (1) 日時及び場所 (2) 正会員及び名誉会員総数及び出席者数(書面又は電磁的方法による表決者若しくは表決委任者がある場合にあっては、その数を付記すること。) (3) 審議事項 (4) 議事の経過の概要及び議決の結果 (5) 議事録署名人の選任に関する事項	総会の議事については、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。 (1) 日時及び場所 (2) 正会員及び名誉会員総数及び出席者数(書面表決者又は表決委任者がある場合にあっては、その数を付記すること。) (3) 審議事項 (4) 議事の経過の概要及び議決の結果 (5) 議事録署名人の選任に関する事項
附則	この定款は、東京都より定款変更認証を受けた平成 年 月 日から施行する。	

6. 小原雄治第32回年会長より、2009年の年会開催状況につき報告がなされた。

一般演題投稿数は3741題（うちLate-breaking abstracts投稿は135題）、会期中ではあるが12月10日までの集計で参加者は8120名（うち事前参加登録6219名）、であり、これまでに順調に進んでいることが報告された。

新しい試みであるITの積極活用（講演要旨集のオンライン化・同メニューは携帯電話にも対応）についても、概ね順調な運びとなっている。

ポスター発表／討論においては、ディスカッサー制度（約400名のPIにディスカッサーを依頼）を導入し、「Meet the Symposists」企画など、議論できる機会を設けた。例年の年会に比べて海外演者招聘補助を充実させ、各シンポジウムには若手PIを中心とした複数の外国人演者を招聘した（シンポジウム54名、ワークショップ25名）。国際性の向上を目標に、要旨の英文執筆推奨を実施し、シンポジウムは要旨・講演ともに英語で統一し、一般演題においても英文執筆を推奨した結果、投稿された演題の英文執筆率は55.5%であったことが報告された。

年会後半の2日間、引き続き活発な討論の場となるよう、会員各位には協力をお願いしたいとの挨拶がなされた。

7. 宮園浩平第33回年会幹事（谷口維紹第33回年会長代理）より第33回（2010年）年会につき報告がなされた。

・名称：第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会 合同大会

・略称：BMB2010（Biochemistry and Molecular Biology 2010）

・会期：2010年12月7日（火）～10日（金）の4日間
（12月11日（土）に東京にて市民公開講座を開催予定）

・会場：神戸ポートアイランド（全21の講演会場＋ポスター会場、展示会場）

・組織委員：

〔第33回日本分子生物学会年会〕

年会長 谷口維紹

庶務幹事 宮園浩平

幹事補佐 武田弘資、宮澤恵二

〔第83回日本生化学会大会〕

会頭 田中啓二

庶務幹事 水島 昇

幹事補佐 石原直忠、反町洋之

・プログラム案

①プレナリーレクチャー

現役で活躍する比較的若手の研究者に講演いた

だ。海外演者・国内演者の2つのレクチャーを二会場（ポートピアホール、会議場メインホール）で各日同時開催とする。

②シンポジウム

4日間を通して最大72テーマのシンポジウムを開催する。年会長企画シンポジウム、プログラム委員企画シンポジウムを柱に、残った開催枠に公募採択企画を当てはめる。（*後日、12月12日開催の第3回準備会議にて、会員より公募する企画はワークショップと位置付けることに変更。ただし内容によってシンポジウムとして採択する可能性もある。）

③一般演題

ポスター発表および一般口頭発表演題は7月に募集する。

④市民公開講座

「病気の原因を見つけその克服を目指す生命科学（仮）」をテーマとして、年会翌日の12月11日（土）午後に東京で開催する。

⑤その他のプログラム

マスターズレクチャーやフォーラムを企画予定。詳細は今後検討する。

8. 花岡文雄第34回年会長より、2011年の年会開催状況につき報告がなされた。

・会期：2011年12月13日（火）～16日（金）の4日間

・会場：パシフィコ横浜

・年会長：花岡文雄

・組織委員：永田恭介（委員長）、菅澤 薫、
三浦正幸、柳澤 純

今年の第32回年会の開催実績をふまえ、魅力ある年会となるように、今後、学術企画を検討していきたい。来年1～2月に、第1回準備会議を開催し、具体的な準備作業に入る予定である。

9. 議長より閉会の挨拶があり、第32回総会が終了した。

上記、平成22年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

平成21年12月11日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
平成22年度通常総会

議長 永田 恭 介 ㊞

議事録署名人 中 西 徹 ㊞

議事録署名人 升 方 久 夫 ㊞

平成 21 年度（2009 年度）収支決算報告

平成 21 年度（2009 年度）収支決算報告書

平成 20 年 10 月 1 日から平成 21 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	予算額	決算額	備 考
I 収入の部			
1 入会金収入	700,000	1,855,000	
正会員	200,000	570,000	
学生会員	500,000	1,285,000	
2 会費収入	71,390,000	67,511,500	
正会員（海外在住含む）	58,500,000	55,909,000	
学生会員（海外在住含む）	11,250,000	10,162,500	
賛助会員	1,640,000	1,440,000	
3 事業収入	213,480,000	227,815,128	
①分子生物学・学術研究事業	206,480,000	214,026,537	
年会	205,980,000	212,491,845	BMB2008 収支より繰り入れ（分子生物学会の案分比率は 6 割）
春季シンポジウム	500,000	1,534,692	第 9 回春季シンポジウム（懇親会参加費、その他）
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	7,000,000	13,788,591	
Genes to Cells 出版収入	7,000,000	13,788,591	Profit Share 12,126,457 円 2008 年分編集費精算より
③その他の事業	0	0	1,662,134 円
その他の事業	0	0	
4 助成金・補助金収入	1,300,000	1,300,000	三菱化学より（奨励賞副賞、選考経費）
5 雑収入・預金利息	150,000	240,927	利息収入、出版社著作権管理機構からの分配金
当期収入合計（A）	287,020,000	298,722,555	
前期繰越収支差額	105,496,282	105,496,282	
収入合計（B）	392,516,282	404,218,837	
II 支出の部			
1 事業費	233,180,000	224,032,405	
①分子生物学・学術研究事業	216,480,000	210,141,712	〈学術集会の開催等〉
年会	205,980,000	198,171,057	BMB2008 収支より繰り入れ（分子生物学会の案分比率は 6 割）
〃	5,000,000	5,000,000	第 31 回年会への定額補助金支出
春季シンポジウム	5,500,000	6,970,655	第 9 回春季シンポジウム（宮崎）
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	12,400,000	9,747,525	
会報刊行費	4,000,000	3,927,525	会報 91、91 増刊号、92、93 号
Genes to Cells 編集費	2,000,000	0	※新契約により年 800 万円まで出版社が負担
Genes to Cells オンライン費用	4,400,000	4,350,000	
ホームページ関係費	2,000,000	1,470,000	10 万円×12 カ月＋メール配信
③その他の事業	4,300,000	4,143,168	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	1,013,041	〈事業費その他〉
事業費その他	3,000,000	3,130,127	・男女共同参画 1,491,136 円 ・若手教育 WG 903,401 円
役員選挙	0	0	・学術事業企画（30 周年出版企画）454,090 円
2 管理費	45,800,000	43,743,868	・GTC 将来計画 WG 208,300 円 ・生科連会費等 73,200 円
事務所賃料	2,800,000	2,535,844	賃料・共益費、光熱費
給与手当	20,000,000	20,748,130	
法定福利費	2,400,000	2,672,820	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	100,000	24,816	職員健康診断
業務委託費	1,500,000	1,291,500	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、税務申告費用
会員管理システム運用管理費	2,200,000	2,514,750	会員管理サーバの運用・保守
印刷費	1,500,000	1,383,570	総会資料、総会委任状ハガキ、会費請求書の出力等含む
通信運搬費	10,000,000	9,163,147	
旅費交通費	2,000,000	1,547,470	
会議費	500,000	273,058	理事会他
支払手数料	250,000	241,383	
消耗品費	850,000	760,251	封筒印刷代含む
雑費	1,300,000	384,576	海外会費クレジットカード決済手数料、外部倉庫代、その他
減価償却費	400,000	202,553	電話機、コピー FAX 複合機
3 租税公課	3,000,000	1,699,200	未払消費税 1,527,700 円 地方税 157,500 円 印紙代 14,000 円
4 特定預金支出	1,000,000	1,074,000	退職給付引当金繰入（規程に準拠）
5 予備費	2,000,000	112,089	論文調査報告書 / 英文チェック費用
当期支出合計（C）	284,980,000	270,661,562	
当期収支差額（A）-（C）	2,040,000	28,060,993	
次期繰越収支差額（B）-（C）	107,536,282	133,557,275	

（単位：円）

平成 21 年度（2009 年度）貸借対照表

平成 21 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額		
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	132,681,356		
前払費用	4,584,538		
立替金	5,581,261		
流動資産合計		142,847,155	
2 固定資産			
工具器具備品	177,919		
差入保証金	614,180		
固定資産合計		792,099	
資産合計			143,639,254
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	357,680		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	1,527,700		
前受会費	346,500		
前受金	5,000,000		
預り金	214,099		
流動負債合計		7,515,979	
2 固定負債			
退職給付引当金	2,566,000		
固定負債合計		2,566,000	
負債合計			10,081,979
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		105,496,282	
当期正味財産増加額		28,060,993	
正味財産合計			133,557,275
負債及び正味財産合計			143,639,254

(単位：円)

平成 21 年度（2009 年度）財産目録

平成 21 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額		
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金			
現金	61,709		
郵便振替 00170-5-592854	21,515,036		
郵便振替 00100-2-465016	73,500		
郵便振替 00110-1-901302	0		
普通預金 三菱東京 UFJ 銀行 春日町支店	2,491,349		
普通預金 三菱東京 UFJ 銀行 所沢支店	2,519,350		
普通預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	182,821		
普通預金 三井住友銀行 飯田橋支店	39,712,122		
普通預金 中央三井信託銀行 本店営業部	6,946,858		
定期預金 三菱東京 UFJ 銀行 春日町支店	10,082,749		
定期預金 みずほ銀行 本郷支店	10,038,803		
定期預金 三井住友銀行 飯田橋支店	10,000,000		
定期預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	10,000,000		
定期預金 中央三井信託銀行 本店営業部	10,000,000		
定期預金 住友信託銀行 東京営業部	9,057,059		
前払費用 事務所家賃 10 月分	211,078		
前払費用 事務所火災保険 H21.10 - H22.8 月分	11,460		
前払費用 11/21 将来計画検討委員会 会場費	12,000		
前払費用 2009 年分 Genes to Cells オンライン費用	3,350,000		
前払費用 2009 年分 Genes to Cells フリーアクセス料	1,000,000		
立替金 編集経費	5,581,261		
流動資産合計		142,847,155	
2 固定資産			
工具器具備品 電話取付一式	140,966		
工具器具備品 複合機	36,953		
差入保証金 事務所	564,180		
差入保証金 編集室	50,000		
固定資産合計		792,099	
資産合計			143,639,254
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金 ホームページ更新費用 9 月分	105,000		
未払金 会員サーバ運用保守 9 月分	178,500		
未払金 通信運搬費 9 月分	24,199		
(外部倉庫、宅急便代、NTT、メールサーバ)			
未払金 印刷費 (コピー・FAX 代 9 月分)	16,150		
未払金 クレジットカード決済処理手数料 (GMO)	33,831		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	1,527,700		
前受会費 平成 22 年度以降会費	346,500		
前受金 GTC 編集費・出版社負担金	5,000,000		
預り金 源泉所得税	214,099		
流動負債合計		7,515,979	
2 固定負債			
退職給付引当金	2,566,000		
固定負債合計		2,566,000	
負債合計			10,081,979
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		105,496,282	
当期正味財産増加額		28,060,993	
正味財産合計			133,557,275
負債及び正味財産合計			143,639,254

(単位：円)

平成 21 年度（2009 年度）個別注記表

平成 20 年 10 月 1 日から平成 21 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

1. 固定資産の減価償却の方法
定率法によっております。
2. 固定資産の減価償却累計額
777,928 円
3. 退職給付引当金の計上基準
職員の退職給付に備えるため、当年度末における退職給付債務の見込額に基づき、
当年度末において発生していると認められる額を計上しております。
4. 担保に供している資産はありません。
5. 保証債務はありません。

【監査報告】

平成 21 年度（2009 年度）決算に関して、平成 21 年 10 月 30 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、平成 21 年度の収支及び正味財産増減の状況並びに同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 11 月 16 日に、学会事務所において、小川智子監事、吉川寛監事による監査を終了しました。（両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた。）ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

理事長 岡 田 清 孝

理事（会計幹事）塩 見 春 彦

監査報告書

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 岡田 清孝 殿

平成21年11月16日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事

小川 智子

平成21年11月16日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事

志川 晃

私たちは、日本分子生物学会の平成21年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続を用いて計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示していると認める。

以 上

独立監査人の監査報告書

平成21年10月30日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 岡田 清孝 殿

宮城公認会計士事務所

公認会計士

宮城 芳規

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の 平成20年10月1日から平成21年9月30日までの平成21年度の計算書類、すなわち、収支決算報告書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類の作成責任は理事者であり、私の責任は独立の立場から計算書類に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積もりの評価も含め全体としての計算書類の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成21年度の収支及び正保財産増減の状況並びに同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 と私の間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

平成 22 年度（2010 年度）収支予算

平成 22 年度（2010 年度）収支予算

平成 21 年 10 月 1 日から平成 22 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	22 年度予算	備 考
I 収入の部		
1 入会金収入	800,000	
正会員	200,000	1,000 円× 200 名
学生会員	600,000	1,000 円× 600 名
2 会費収入	71,270,000	
正 会 員（海外在住含む）	58,500,000	6,500 円× 10,000 名×約 90%
学生会員（海外在住含む）	11,250,000	3,000 円× 5,000 名×約 75%
賛助会員	1,520,000	40,000 円× 38 口（35 社）
3 事業収入	221,500,000	
①分子生物学・学術研究事業	213,500,000	<学術集会の開催等>
年会	209,000,000	第 32 回年会（支出予算額－学会補助金定額分 500 万円）
春季シンポジウム	4,500,000	スクール形式 宿泊費・昼食代等の実費バック料金分
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	8,000,000	
Genes to Cells 出版収入	8,000,000	ワイリーブラックウェル社より Profit Share 700 万円、編集定額補助金 100 万円
③その他の事業	0	
その他の事業	0	
4 助成金・補助金収入	1,300,000	三菱化学より、奨励賞副賞および選考経費として
5 雑収入	200,000	利息収入、出版社著作権管理機構分配金等
当期収入合計（A）	295,070,000	
前期繰越収支差額	133,550,000	※ 21 年度決算の繰越金概算とした。
収入合計（B）	428,620,000	
II 支出の部		
1 事業費	242,100,000	
①分子生物学・学術研究事業	223,500,000	<学術集会の開催等>
年会	214,000,000	第 32 回年会（定額補助金 500 万円は収入科目の中で精算）*実質 500 万円を補助
春季シンポジウム	9,500,000	支出予算額－収入予算額（スクール形式・宿泊費等）*実質 500 万円を学会補助
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	11,050,000	
会報刊行費	4,000,000	
Genes to Cells 編集費	1,000,000	学会負担分（編集費用 900 万円のうち 800 万円は出版社負担精算へ）
Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	ワイリーブラックウェル社へ支払い（フリーアクセス料 100 万円を含む）
ホームページ関係費	1,700,000	10 万円× 12 カ月、メール配信・予備費 50 万円
③その他の事業	7,550,000	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	
男女共同参画事業費	1,500,000	
創立 30 周年記念・出版事業	1,000,000	
事業費その他	2,000,000	若手教育 WG 活動費含む
理事選挙	250,000	電子投票
事業費・予備費	1,500,000	
2 管理費	46,850,000	
事務所賃料	2,800,000	賃料、管理費、光熱費等含む
給与手当	21,000,000	事務局人件費
法定福利費	2,800,000	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	50,000	雇用職員健康診断等
業務委託費	1,500,000	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、税務申告費用
会員管理システム運用管理費	2,400,000	サーバー 運用保守等
印刷費	1,500,000	会費請求書出力含む
通信運搬費	10,000,000	会報、会費請求、年会プログラム
旅費交通費	2,300,000	理事会、将来計画検討委員会 他
会議費	500,000	理事会、将来計画検討委員会 他
支払手数料	300,000	
消耗品費	850,000	封筒代含む
雑費	700,000	
減価償却費	150,000	電話機、コピー FAX 複合機
3 租税公課	3,000,000	消費税、法人税等
4 特定預金支出	1,100,000	退職給付引当金
5 予備費	2,000,000	
当期支出合計（C）	295,050,000	
当期収支差額（A）-（C）	20,000	
次期繰越収支差額（B）-（C）	133,570,000	

（単位：円）

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、本学会賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問合わせ、申請書類を各自お寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部
- 3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）
- 4) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 田畑 哲之
〒102-0072 千代田区飯田橋3-11-5
20 山京ビル 11 階
日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 町田 泰則
〒102-0072 千代田区飯田橋3-11-5
20 山京ビル 11 階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

研究助成一覧

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第41回三菱財団自然科学研究助成	(財)三菱財団 ☎ (03) 3214-5754 〒100-0005 千代田区丸の内2-3-1	総額3億円、 40件程度	2010年 3月10日	1件当たり 2,000万円まで	自然科学の基礎となる独創的、かつ先駆的研究とともに、すぐれた着想で新しい領域を開拓する萌芽ともなる研究（原則として個人研究）。
新化学発展協会平成22年度研究奨励金	(社)新化学発展協会 ☎ (03) 5297-8820 〒101-0041 千代田区神田須田町1-12	9課題、 各課題1件	2010年 1月31日	1件 100万円	新化学の発展に資する若手研究者（39歳以下）の研究に対して、研究奨励金を交付。研究課題有り。
山田科学振興財団2010年度研究援助	(財)山田科学振興財団 ☎ (06) 6758-3745 〒544-8666 大阪市生野区巽西1-8-1	15件程度 (2件)	2010年 3月31日	1件当たり 100～500万円、 総額4,000万円	自然科学の基礎的研究に対する研究費援助。 「推薦書は山田財団HPよりダウンロード http://www.yamadazaidan.jp/ 」
第26回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎ (03) 3263-1722 〒102-8471 千代田区一番町6 日本学術振興会内	1件 (1件)	2010年* 5月15日	賞状、賞牌、 1,000万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。第25回の授賞分野は「感覚の生物学」。
第27回持田記念学術賞	(財)持田記念医学薬学振興財団 ☎ (03) 3357-1282 〒160-0003 新宿区本塩町7-6 四谷ワイズビル	2件以内 (1件)	2010年* 7月31日	1件 500万円	生命科学・薬物科学・情報科学と医療応用の研究の分野における研究で、顕著な功績があり、かつ新進気鋭の研究者。
第28回研究助成		総額 1億6,000万円	2010年* 6月26日	1件 200万円	
第27回国内および海外留学補助金		総額 1,000万円	2010年* 6月26日	1件 50万円	
平成23年度笹川科学研究助成	(財)日本科学協会 ☎ (03) 6229-5365 〒107-0052 港区赤坂1-2-2 日本財団ビル	約350件	募集期間 2010年* 10月1日 ～ 10月15日	1件当たり100万円まで	人文・社会科学および自然科学（医学を除く）の研究計画に関するもの。4月1日現在、35歳以下の若手研究者へ助成。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
上 原 賞	(財)上原記念生命科学財団 ☎ (03) 3985-3500 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3	2 件以内 (1 件)	2010 年 * 9 月 8 日	金牌、 2,000 万円	生命科学の栄養学、薬学、基礎 および臨床医学、社会医学、東 洋医学で顕著な業績を挙げ、引 き続き活躍中の研究者。
第 27 回井上學術賞	(財)井上科学振興財団 ☎ (03) 3477-2738 〒 150-0036 渋谷区南平台町 15-15-601	5 件以内 (2 件)	2010 年 * 9 月 20 日	賞状、金メダル、 200 万円	自然科学の基礎的研究で特に顕 著な業績を挙げた者（ただし締 切日現在満 50 歳未満）。
第 3 回井上リサーチ アワード		3 名以内 (うち 1 名以上 女性研究者)	2010 年 * 7 月 31 日	1 人当たり 1,000 万円 (期間は 2 年)	開拓的發展を目指す若手研究者 の独創性と自立を支援する目的 で、研究を助成。期間は 2 年。
第 19 回木原記念財団 學術賞	(財)木原記念横浜生命科学振興財団 ☎ (045) 502-4810 〒 230-0045 横浜市鶴見区末広町 1-6	1 件 (1 件)	2010 年 * 9 月 30 日	賞状、記念牌、 200 万円	最近において生命科学の分野で 優れた独創的研究を行っている 国内の研究者で、原則として締 切日現在 50 歳以下の者。
木原記念財団特別賞 (平成 20 年より新設)		1 件 (1 件)	2010 年 * 9 月 30 日	賞状、記念牌、 100 万円	生命科学の分野で独創的かつ社 会的貢献に繋がる研究を行って いる研究者で 50 歳以下の者。
平成 22 年度日産科学 賞	(財)日産科学振興財団 ☎ (03) 3543-5597 〒 104-0061 中央区銀座 7-17-2	1 件 (1 件)	2010 年 * 9 月 15 日	賞状、300 万円	自然科学分野で、新しい研究分 野・領域の開拓に繋がる学術の 発展に大きな貢献をした、わが 国の公的研究機関に所属する概 ね 50 歳以下の研究者。年度によ り、対象研究分野の指定有り。
住友財団 2010 年度基 礎科学研究助成	(財)住友財団 ☎ (03) 5473-0161 〒 105-0012 港区芝大門 1-12-6 住友芝大門ビル 2 号館	総額 1 億 4,000 万円 100 件程度	2010 年 * 6 月 30 日	1 件当たり 500 万 円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学) の各分野及びこれらの複数にまた がる分野の基礎研究で萌芽的 なもの。若手研究者（個人または グループ）を対象とする。
第 51 回藤原賞	(財)藤原科学財団 ☎ (03) 3561-7736 〒 104-0061 中央区銀座 3-7-12	2 件 (1 件)	2010 年 1 月 31 日	副賞 1,000 万円	推薦の対象は自然科学分野に属 するもの。わが国に国籍を有し、 科学技術の発展に卓越した貢献 をした者。
平成 23 年度科学技術 分野の文部科学大臣 表彰科学技術賞およ び若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 ☎ (03) 6734-4071 〒 100-8959 千代田区霞が関 3-2-2	科学技術賞 140 件(年)のうち、 研究部門は 40 件程度 若手科学者賞 は 100 名程度 (学会推薦枠は 定まっていな いが推薦は若 干名まで)	2010 年 * 7 月 17 日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄 与する可能性の高い独創的な研 究又は発明を行った個人又はグ ループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立 った研究等、高度な研究開発能 力を示す顕著な研究業績を挙げ た若手研究個人。
平成 22 年度島津賞	(財)島津科学技術振興財団 ☎ (075) 823-3240 〒 604-8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町 1	1 件 (推薦枠は若干件)	2010 年 * 9 月 30 日	賞状、賞牌、 副賞 300 万円	科学技術、主として科学計測お よびその周辺の領域における基 礎的な研究において、近年著し い成果をあげた功労者を対象と する。
島津科学技術振興財 団研究開発助成		総額 1,000 万円	2010 年 * 9 月 30 日	1 件当たり 100 万円以下	上記同様に研究対象とする、国 内の研究機関に所属する 45 歳以 下の新進気鋭の日本人研究者。
東レ科学技術賞	(財)東レ科学振興会 ☎ (047) 350-6103 〒 279-8555 浦安市美浜 1-8-1 東レビル	2 件前後 (2 件)	2010 年 * 10 月 8 日	1 件につき 賞状、金メダル、 500 万円	学術上の業績顕著な者、学術上 重要な発見をした者、重要な発 明により効果が大い者、技術 上の重要問題を解決し貢献が大 い者。
東レ科学技術研究助 成		総額 1 億 3,000 万円 10 件程度 (2 件)	2010 年 * 10 月 8 日	特に定めず最大 3,000 万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の 進歩・発展に貢献するところが 大きいと考えられる、独創的、 萌芽的な研究を活発に行ってい る若手研究者（原則として 45 歳 以下）。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 42 回内藤記念科学振興賞	(財)内藤記念科学振興財団 ☎ (03) 3813-3005 〒 113-0033 文京区本郷 3-42-6 NKD ビル 8 階	1 件 (1 件)	2010 年 * 10 月 1 日	金メダル、 1000 万円	人類の健康の増進に寄与し得る自然科学の基礎的研究において、独創的テーマに取り組み、その進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
第 42 回海外学者招へい助成金		(前期・後期各 10 件)	2010 年 * 6 月 1 日・ 10 月 1 日	1 件 20～80 万円 まで (エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者を招へいする受入れ責任者に贈呈。
ブレインサイエンス財団研究助成		8～12 件	2010 年 * 10 月 15 日	1 件 100 万円	ブレインサイエンス研究分野における独創的な研究計画への助成。
塚原伸晃記念賞	(財)ブレインサイエンス振興財団 ☎ (03) 3273-2565 〒 104-0028 中央区八重洲 2-6-20	1 件		1 件 100 万円	生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている 45 歳以下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2011 年 * 1 月 15 日	1 件 30 万円まで	ブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の研究者の派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1 件 30 万円まで	同分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の招聘を助成。
平成 23 年度研究助成	(財)長瀬科学技術振興財団 ☎ (06) 6535-2117 〒 550-8668 大阪市西区新町 1-1-17	10 数件	2010 年 * 11 月 30 日	1 件 250 万円以内	生化学および有機化学等の分野において研究活動を行う研究者または研究機関。
ノバルティス研究奨励金	(財)ノバルティス科学振興財団 ☎ (03) 5464-1460 〒 106-0031 港区西麻布 4-16-13 西麻布 28 森ビル 10F	約 30 件 指定機関からの推薦必要	2010 年 * 9 月 11 日	1 件 100 万円	生物・生命科学およびそれに関連する化学の領域における創造的な研究に対して助成。
第 7 回日本学術振興会賞	(独)日本学術振興会 ☎ (03) 3263-1762 〒 102-8472 千代田区一番町 8 番地	20 件程度	2010 年 * 5 月 26 日～ 28 日 (受付日)	賞状、賞碑、 110 万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者 (45 歳未満)。
(財)材料科学技術振興財団 山崎貞一賞	(財)材料科学技術振興財団 ☎ (03) 3415-2200 〒 157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6	各分野 1 件	2010 年 4 月 30 日	賞状、金メダル、 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び半導体装置」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の 4 分野からなり、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
平成 22 年度研究助成	(財)光科学技術研究振興財団 ☎ (053) 454-0598 〒 430-0926 浜松市中区砂山町 325-6	総額 4,000 万円	2010 年 * 8 月 31 日	助成金総額 約 4,000 万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。
2010 年度朝日賞	(財)朝日新聞文化財団 ☎ (03) 5540-7453 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2	ここ最近 は 4～5 件 (1 件)	2010 年 * 8 月 31 日	正賞(ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第 22 回加藤記念研究助成	(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 ☎ (042) 725-2576 〒 194-8533 町田市旭町 3-6-6	25 件 総額 5,000 万円	2010 年 * 8 月 31 日	1 件 200 万円	バイオサイエンス分野における有能な若手研究者を発掘し、その創造的かつ先駆的研究を支援する。年齢制限あり。

●件数の () 内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

*は、本年度の案内を受取っておらず、昨年締切日を参考に示してあります。

締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

●学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いいたします。

各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○第13回マリンバイオテクノロジー学会大会 開催のお知らせ

第13回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の要領で開催いたします。

会 期：平成22年5月29日(土)～30日(日)
会 場：広島大学 東広島キャンパス 生物生産学部C棟
大会役員：大会会長 堀 貫治
広島大学大学院生物圏科学研究科 教授
実行委員長 長沼 毅
広島大学大学院生物圏科学研究科 准教授
大会事務局：〒739-8528 広島県東広島市鏡山1-4-4
広島大学大学院生物圏科学研究科内
第13回マリンバイオテクノロジー学会大会実行委員会
TEL：082-424-7986 FAX：082-424-7916
E-MAIL：takn@hiroshima-u.ac.jp

大会の内容：

1. 一般講演（口頭発表、ポスター発表）
2. シンポジウム（一般）
3. 懇親会
* シンポジウムの企画を公募致します。シンポジウムの企画をご希望の方は大会事務局までご連絡下さい。

発表形式：

1. 口頭発表：一般講演は質疑含み15分
液晶プロジェクター使用
2. ポスター発表：学生を対象とした優秀ポスターの表彰を予定

一般講演のセッション：

1. 微生物
2. 微細藻
3. 海藻・付着生物
4. 魚介類
5. 天然物化学・未利用資源
6. バイオミネラルゼーション
7. マリンゲノム
8. 環境・環境適応
9. その他

発表申込みの締め切り 平成22年3月12日(金)必着
講演要旨の締め切り 平成22年3月31日(木)必着
事前参加登録締め切り 平成22年4月30日(金)必着
講演申し込み方法および参加登録方法の詳細は、大会ホームページでご確認下さい。

第13回大会ホームページアドレス：

<http://www.med-gakkai.org/jsmb-13/>

学会ホームページ：<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsmb/>

○第14回国際免疫学会議のお知らせ メインテーマ

「21世紀における免疫学の潮流 - 感染症、癌、自己免疫疾患、アレルギーの撲滅をめざして」

主 催：日本免疫学会
共 催：日本臨床免疫学会
共同主催：日本学術会議
会 期：2010年8月22日(日)～27日(金) 6日間
会 場：神戸ポートピアホテル、神戸国際展示場

早期登録締切：2010年5月31日
(一般40,000円、学生10,000円、6月1日以降はそれぞれ5,000円増)

オンライン参加登録・宿泊予約：受付中

詳細情報はホームページをご覧ください。

<http://www.ici2010.org>

問い合わせ先：

2010年国際免疫学会議・組織委員会・事務局
〒565-0871 吹田市山田丘2-2
大阪大学大学院医学系研究科 C8
感染免疫医学講座・免疫動態学内
TEL：06-6879-3971 FAX：06-6879-3979
E-mail：2010ici@orgctl.med.osaka-u.ac.jp

日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2010年2月1日現在)

アサヒビール株式会社 食の基盤技術研究所
アジレント・テクノロジー株式会社
アトー株式会社 営業開発グループ
アプライドバイオシステムズジャパン株式会社
株式会社エー・イー企画
沖縄科学技術研究基盤整備機構 事業推進部
科学技術振興機構 研究基盤情報部 バイオインフォマティクス課
科研製薬株式会社 創薬研究部
協和発酵キリン株式会社 研究本部研究推進部
株式会社コクサン
コスモ・バイオ株式会社 開発部
産業技術総合研究所 北海道センター図書室
ジャスコインタナショナル株式会社 第二事業部営業一課
住友化学株式会社 農業化学品研究所
第一三共株式会社 抗体医薬研究所
タカラバイオ株式会社 バイオインダストリー部
武田バイオ開発センター株式会社 プロジェクトマネジメント部
株式会社ダスキン開発研究所
田辺三菱製薬株式会社 研究本部研究企画部
東洋紡績株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 技術営業部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD バイオサイエンス
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
日本たばこ産業株式会社 たばこ中央研究所
浜松ホトニクス株式会社 システム事業部特機営業部
ヒゲタ醤油株式会社 研究開発部
日立公共システムエンジニアリング株式会社
富士レビオ株式会社 研究開発部門研究支援グループ
フナコシ株式会社
三菱化学株式会社 イノベーションセンター
ヤマサ醤油株式会社 R&D 管理室
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社 AS 事業部
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
和研薬株式会社 大阪センター営業推進部

〈50音順〉

■日本分子生物学会第10回春季シンポジウムの公式サイトが開設されています。

URL: <http://www.mbsj-spring2010.org/>

■第33回日本分子生物学会年会・第83回日本生化学会大会合同大会（BMB2010）のホームページが公開されました。

URL: <http://www.aeplan.co.jp/bmb2010>

特定非営利活動法人

日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-11-5

20 山京ビル 11 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年3回刊行)

第95号 (2010年2月)

発行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——岡田 清孝